

聖所

The Sanctuary



人類に与えられた天の御座からのメッセージ

「楽しい、騒がしい、汚い！」



宣伝文句はそう言っています。しかし、楽しく、騒がしく、汚い教会が、それでも教会だと本当に言えるのでしょうか。急いで教会に行きたい子どもたちが、親の手を本気で引っ張っている姿を想像できますか。「汚い教会」という概念は、アドベンチストにとって新しい考え方です。教会は本当に楽しくて家族志向の活動の場になれるのだと、イギリスの1つの教会が証明しています。実際、そこはとても成功しているので、地域に住む教会員でない親子が参加する場所となるように、アドベンチストの親子は遠慮するようといわれているほどです。

今期の13回特別献金の一部は、トランスヨーロッパ支部の全ての地域に、この「汚い教会」のプログラムを設立するのを助けるために用いられます。私たちの教会は家族というものに心を向けています。そして、このプログラムはそのことを示す1つの素晴らしい方法です。他の人々をイエスさまに導くために教会が汚くなることを、私は嬉しく思います。

13回特別献金日 12月28日

今期の13回特別献金の一部はトランス・ヨーロッパ支部の教会のために用いられます。

MADVENTIST
MISSION
WWW.ADVENTISTMISSION.ORG

安息日学校の目標

- 学 ば う 主の愛を日々味わうために
- 祈 ろ う 主の愛は真実だから
- 温めよう 主の愛を兄弟姉妹に尽くすため
- 伝えよう 主の愛を世に満たすため
- 献げよう 主の愛が求めるままに
- 集まろう 主の愛への私の証しは定刻出席

※上記の目標をもとに、各教会の必要に合う安息日学校の目標を立ててください。

序 言

(聖所)

救済のイメージ

紛れもなく、神の愛と御品性の最大の啓示は十字架であり、主はその十字架において、人間イエスという形でこの世の罪の犠牲として御自分をおさげになりました。そして、私たちがこの大いなる犠牲の意味をよりよく理解できるように、神は救済計画の視覚的表現（説明）として、地上の聖所を考案なさったのです。しかし、この地上の聖所は、神の御臨在の中心であり、宇宙における神の活動の真の中心である天の聖所を模したものにすぎません。

神がこの地上に聖所をお建てになったのは、教材として用いるためでした。イスラエルの聖所とそこにおける奉仕は、贖罪^{しよくざい}、神の御品性、罪の最終的な処分、といったことに関する重要な真理を示していたのです。

聖所は、私たちの犠牲、私たちの大祭司としてのイエスを理解するうえで、助けとなるひな型でした。バプテスマのヨハネが彼の弟子たちに、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」（ヨハ1：29、36）と言ったとき、彼らがその意味を理解できたのは、聖所についてある程度わかっていたからです。また、ヘブライ人への手紙を最初に受け取った人々が、天でイエスのなさっておられることを把握するためには、古代イスラエ

ルの祭司職に関する知識が前提となりました。また聖所に関する用語は、クリスチャン生活に関する真理を教えるためにも用いられています。要するに、聖所の制度に関する知識が、キリストによる救済という新しいメッセージの基礎になったのです。

ところが、キリスト教時代の大半にわたって、聖所に関するメッセージはほとんど忘れ去られていました。19世紀半ばになってセブンスデー・アドベンチストたちは、再臨前審判を含む救済に関する神の理論的枠組みを再評価し始めますが、そのときによりやく聖所が改めて重視されたのです。

「聖所問題が、1844年の失望の秘密を解くかぎであった。それは、互いに関連し調和する真理の全体系を明らかにし、神のみ手が大再臨運動を導いてきたことを示し、そして、神の民の立場と働きとをはっきりさせて、今なすべきことを明らかにした」（『希望への光』1800ページ、『各時代の大争闘』下巻138ページ）。

真理の全体系に対する鍵として、聖所とキリストの祭司職とが、セブンスデー・アドベンチストの信仰の基礎となりました。そして今もなお、そうあり続けています。実際、聖所のメッセージはアドベンチストの**独特な**教理です。と同時に、この教会の教理の中で（安息日の教理を除くなら）、これほど多くの挑戦を受けてきたものはほかにありません。幸いなことに、このような挑戦は、長年にわたって跳ねのけられてきたばかりか、この極めて重要な教えに対する私たちの理解を深め、一つの民として、私たちを救済の理解において強めてきたのです。

私たちが聖所に最大限の関心を払うようにと、エレン・G・ホワイトは勧めています。なぜなら、「天の聖所は、人類のためのキリストのお働きの中心そのものである。それは、地上に生存するすべての者に関係している。それは、贖罪の計画を明らかにし、われわれをまさに時の終わりへと至らせて、義と罪との戦いの最後の勝利を示してくれる。すべての者が、これらの問題を徹底的に研究……することは、何よりも重要なことである」（『希望への光』1834ページ、『各時代の大争闘』下巻222ページ）からです。そうすることで私たちは、「この時代にあって必要な信仰を働かせ……、神が彼らのために計画しておられる立場を占めること」（同左1835,1836ページ、同右222ページ）ができるようになります。

聖所は神の御心を明らかにします。聖所について学ぶことで、私たちは至高者の御臨在と救い主の人柄に近づき、より深い個人的な関係を持つことができるようになるでしょう。

このようなわけで、私たちは今期、神の聖所（地上のひな型と天上の原型の双方）について学ぶのです。

〈著者〉マーティン・プレブストル

（ボーゲンホーフエン神学院ヘブライ語聖書教授、オーストリア）

目 次

(聖所)

序 言	1
第 1 課 天の聖所	10月 5 日… 4
第 2 課 地上における「天」	10月 12日… 11
第 3 課 犠牲	10月 19日… 18
第 4 課 聖所から得られる教訓	10月 26日… 25
第 5 課 贖罪——清めの献げ物	11月 2 日… 32
第 6 課 贖罪日	11月 9 日… 39
第 7 課 キリスト——私たちの犠牲	11月 16日… 46
第 8 課 キリスト——私たちの祭司	11月 23日… 53
第 9 課 再臨前審判	11月 30日… 60
第10課 終末論的贖罪日	12月 7 日… 67
第11課 私たちの預言的メッセージ	12月 14日… 74
第12課 神の御品性を巡る宇宙的争い	12月 21日… 81
第13課 聖所から得られる勧告	12月 28日… 88

今期のテキストはセブンスデー・アドベンチスト教団世界総会安息日学校部より提供された大人用ガイド標準版英文原稿を教団翻訳部が日本語に翻訳したものを元に教団安息日学校部でリライト・編集したもので、必ずしも英文ガイドを直訳したものではありません。編集にあたっては最終校閲を安息日学校協力牧師（池増信男、新名幹二、堀内一誠、安居益也）、校閲・校正を福音社編集部にご協力いただきました。口語訳聖書、新共同訳聖書からの聖句引用に関しては、日本聖書協会の承認を受けております。引用聖句および聖句箇所表記は原則として新共同訳聖書を使用しております。

第1課

10月5日



天の聖所

●暗唱聖句●

「あなたはお住まいである天にいましてその祈りと願いに耳を傾け、裁きを行ってください」
(列王記上 8 : 49、新共同訳)

「あなたのすみかである天で、彼らの祈と願いを聞いて、彼らを助け（てください）」
(列王記上 8 : 49、口語訳)

今週の聖句

エレミヤ 23 : 23、24、詩編 89 : 15 (口語訳 89 : 14)、
黙示録 4 章、5 章、詩編 11 : 4 ~ 7、申命記 25 : 1、
ヘブライ 8 : 1、2

安息日午後

今週のテーマ

9月28日

「ねえ、神様ってどこに住んでるの？」

無邪気な6歳の子どもの質問は、案外やっかいなものです。しかもこういった質問は、さらに難しい疑問へと容易につながっていきます。例えば、「もし神が一つの場所に住んでおられるとしたら、どうやって遍在することがおできになるのだろうか」「そもそも神は住む場所を必要としておられるだろうか」「もし必要でないのなら、なぜそのような場所を持っておられるのだろうか」「もし必要であるのなら、その理由は何なのだろうか」……

いずれも良い質問であり、私たちにわかっている部分が少ない（わからない部分が多い）ことを考えるとき、これらに答えることは簡単ではありません。

しかしそれにもかかわらず、わかっている限りのことで、答えることはできます。私たちセブンスデー・アドベンチストは、神が天に住んでおられること、私たちのために「天上で」積極的に働いておられること、そしてその働きが天の聖所であることを聖書によって知っています。

聖書は明快です。天の聖所は実在の場所であり、その聖所から私たちは神の御品性と働きに関する真理を学ぶことができます。このように、今週の研究の焦点は、天の聖所と神がそこで行っておられることです。というのも、神が聖所で行っておられることは、ひとえに私たちのためだからです。

日曜日

神の住まい

9月29日

私たちはしばしば、「神はどこにもおられる」とか、「神は遍在（宇宙のあらゆる場所に存在）される」とか言います。「わたしはただ近くにいる神なのか、……わたしは遠くからの神ではないのか。……天をも地をも、わたしは満たしているではないか」（エレ23：23、24）。ダビデも、神から逃れられる者はいない、と認めています（詩編139編）。確かにパウロが主張するように、少なくとも霊的な意味において、神はすべての人のそば近くにおられるのです（使徒17：27、28）。

遍在性という御性質に加えて、神は永遠の存在でられます。神には始めも終わりもありません（詩編90：2）。神はこれまでずっとおられましたし、これからもずっとおられます（ユダ25節）。

問1 列王記上8：49と詩編102：20（口語訳102：19）を読んでください。これらの聖句は、神が住んでおられる場所について、どのようなことを教えてください。私たちはどのように理解すべきでしょうか。それは理解できることですか。

聖書には、神の住まいが天にある、と述べている箇所がたくさんあります（列王上8：30、43、49）。これは、神がほかの場所よりも天におられることが多い、という意味なのでしょう。神は特別な形で、つまり栄光の輝きと純粋な神聖さに包まれて、明らかに天に住んでおられます。神の御臨在の最大のあらわれは、天にあるのです。

しかし、神の「通常の御臨在」と「特別の御臨在」とは違います。神は通常、どこにでもおられますが、天と（あとで学ぶように）天の聖所においては、特別な形で御自分をあらわされるのです。

もちろん、神の物理的な御性質に対する私たちの理解は限られています。そのことは認めざるをえません。神は霊であり（ヨハ4：24）、いかなる構造の中にも、範囲の中にも、納めることができないのです（列王上8：27）。それなのに聖書は、実在の場所として天（ヨハ14：1～3）と天の聖所（ヘブ8：2）について述べています。その場所で、神の姿を見ることができるというのは（使徒7：55、56、黙4：2、3）。天と天の聖所とは、神が御自分の被造物にお会いになる場所であると、私たちは結論づけざるをえません。

問2 詩編 47:7～10（口語訳 47:6～9）、93:1、2、103:19 を読んでください。神とその御座について、これらの聖句は、どのようなことを教えてくれますか。

天の御座の幻が、聖書には何度となく登場します。それらの幻のほとんどは、神を王とする天の集会のようなものを描写したものです。興味深いことに、たいいていの場合、その集まりは人間の事柄に関係するもので、正しい人たちのために行動し、語っておられる神を描いています。

聖書はまた、神を君主として示しています。例えば、主の王権は詩編の中に繰り返し出てくる主題です。神は天の王であられるとともに、「全地の王」（詩編 47:8、口語訳 47:7）でもあられ、未来においても、今この場においても、すでに王なのです（詩編 93:2）。

神の御座が天に設けられているということは、いくつかの意味を持ちます。その一つは、神が独立しておられ、宇宙の他のいかなるものよりも上位におられるということです。

問3 詩編 89:15（口語訳 89:14）、97:2 を読んでください。これらの聖句は、神の御品性と統治の仕方について、どのようなことを教えてくれますか。

神の統治には、公正や正義とともに愛や誠実さも含まれます。こういった道徳的資質は、神が人間の世界でいかに行動なさるのか、また全宇宙において御自分の立場をいかに主張されるのかを説明しています。神の統治を構成するこれらの資質は、神が御自分の民に、生活の中であらわしてほしいと期待しておられる資質と同じものであり（ミカ 6:8、イザ 59:14 と比較）、そのように生きることは、私たちにとって聖なる特権なのです。

「神の自然の法則に従うことによって地がその宝をうみ出すように、神の道徳律に従うことによって民の心は神のご品性を反映できるのであった」（『希望への光——クリスチャン生活編』654 ページ、『アドベンチスト・ホーム』150 ページ）。

火曜日

天上の礼拝

10月1日

問4 黙示録4章、5章を読んでください。これら二つの章は、神の天の住まいについて、どのようなことを教えてください。また、救済計画はこれらの聖句において、どのように示されていますか。

天の御座の部屋の幻は、天の聖所の幻です。このことは、ヘブライの宗教制度に関する言葉から明かです。例えば、黙示録4:1の「門」「ラッパ」といった言葉は、『七十人訳聖書』（旧約聖書の古代ギリシア語訳）で聖所に言及する際にしばしば登場します。黙示録4:3に出てくる三つの宝石は、大祭司の胸当ての一部でしたし、5節の「七つのともしび」は、ソロモンの神殿の燭台を連想させます。4節の「二十四人の長老」は、祭司たちが年間を通じて行った奉仕が24の組で分けられていたことや、香を入れる金の鉢に盛られた祈りの献げ物を思い出させます（詩編141:2）。これらの聖句はいずれも、地上の聖所を中心にして行われていた旧約聖書の礼拝奉仕を指し示しているのです。

そして言うまでもなく、黙示録5章の「屠られた小羊」は、キリストの犠牲的な死を指しています。小羊なるキリストは、神の救いの唯一の仲保者であり、その勝利（5節）と犠牲（9節、12節）と神性（13節）のゆえに、敬服すべき方とみなされるのです。

「キリストは人性をお取りになり、御自分の命を犠牲として投げ出された。このようにして、人間は神性を共有する者となり、永遠の命を得ることができるのである」（『セレクトッド・メッセージ』第3巻141ページ、英文）。

神の御座を中心に描かれているこの二つの章の中に見られるのは、人類の救済のために働かれる神です。そして、大争闘という主題の中心であるその働きは、天上の他の知的存在の前で繰り広げられています。

◆ キリストが、つまり神御自身が人性をお取りになり、私たちの身代わりとして死なれたこと——言い換えれば、罰せられなければならない罪をあなたが犯したのに、その罰をキリストが引き受けられたこと——の意味について考えてみてください。なぜこの真理が、あなたのあらゆる行動の動機にならなければならないのですか。

問5 詩編 11：4～7、ハバクク 2：20 を読んでください。神は天の神殿において、ほかにどのようなことをなさっておられますか。そのことを知るの、なぜ重要なのですか。

詩編の多くは、神が正しい人たちの必要や彼らの直面する不正に無関心でないことを明らかにしています。神は、是正を必要とする問題に対処し、優れた裁判官ならだれもがするように、「正しい者を無罪とし、悪い者を有罪とする」(申 25：1) のです。

神が裁きをなさるとき、御座の部屋は裁きの部屋に、天の玉座は裁きの座になります。御座に着く者は裁く者である(詩編 9：5～9 [口語訳 9：4～8] 参照)という考えは、古代中東においてよく知られており、しばしば王が裁判官の役割をも果たしました。

神の裁きには、悪い人も正しい人も関与します。悪い人たちはソドムとゴモラが受けたような罰を受ける一方で、正しい人たちは「主のみ顔を仰ぎ見るであろう」(詩編 11：7、口語訳)。御座の部屋と裁きが結びついている典型的な例は、ダニエル 7：9～14に見られます(この重要な聖句の研究はのちほど)。ここでも、裁きは二つの要素から成り立っています。すなわち、正しい人たちを擁護する判決と、神に敵対する者たちを非難する判決です。

ハバクク書において預言者ハバククが、なぜ不正に対して黙っておられるのですか、と神に尋ねたあと(ハバ 1 章)、神は、(わたしは) 必ず裁くであろう、とお答えになっています(同 2：1～5)。偶像には「命の息」(同 2：19)、つまり「霊」はありませんが、創造主なる神は天の聖所である神殿の御座に着き、いつでも裁ける状態にあるのです。

ハバククは訴えます。「全地よ、御前に沈黙せよ」(ハバ 2：20) と。神の裁定と裁きに対する適切な態度は、畏怖の念を抱いて沈黙し、静かに敬意を表することです。神が特別に御臨在なされ、天の住人たちによる礼拝をお受けになる場所は、すべての人間のために神が正しい判決を下される場所と同じであり、それは天の聖所なのです。神は公正でおられ、正義に関する私たちのあらゆる疑問は、私たちが望むときではなく、神がお望みになるときに答えられるでしょう。

木曜日

救済の場

10月3日

ヘブライ8:1、2を読んでください。ヘブライ人への手紙は、キリストが天の聖所で大祭司として働いておられる、と教えています。そこでの彼の働きは、私たちの救済に集中しています。というのも、キリストが「わたしたちのために神の御前に現れてくださったからです」（ヘブ9:24）。キリストは私たちに同情し、確約をお与えになっています。私たちは拒絶されたりせず、キリストが成し遂げられたことのゆえに、憐れみと恵みを受けることになる、と（ヘブ4:15、16）。地上の聖所においてと同様、天の聖所は信者の罪のために「贖罪」（つまり「和解」）がなされる場所です（ヘブ2:17）。私たちのために死なれたそのイエスが、天においても「私たちのために」働いておられるのです。

黙示録1:12～20、8:2～6、11:19、15:5～8を読んでください。これらの聖句には、聖所を連想させるものが出てきます。実際のところ、黙示録の主要な項目は、たいてい聖所の場面で始まっているか、聖所の場面を含んでいます。

その最初の場面には、大祭司の服を着て、七つの金の燭台の間を歩いておられるキリストが登場します（黙1:12～20）。第二の場面には、天の御座の部屋が登場し、聖所を連想させるさまざまなもの——玉座、ともし火、海、屠られた小羊、血、香の入った金の鉢など——が出てきます（黙4章、5章）。第三の場面は、天の聖所における第一の部屋という設定で、継続的になされている執り成しの奉仕に言及しています（黙8:2～6）。第四の場面にして、中心的な場面は、第二の部屋の中にある契約の箱を垣間見せています（黙11:19）。第五の場面は、天の幕屋の全体を見せています（黙15:5～8）。第六の場面は、聖所への言及がはっきりとなされていないという点においてユニークで、それは恐らく、聖所でのキリストの働きが終わったことを説明するためなのでしょう（黙19:1～10）。そして最後の場面は、「天から下って来る」幕屋として描かれている、輝く聖なる都のことをだけを記しているのです（黙21:1～8）。

これらの場面を注意深く研究すると、それぞれが相互に関連しており、神によって成し遂げられる救済の進展——地上のキリストに始まり、天の聖所の第一、第二の部屋における働き、大祭司としての働きの終了、そして新しい地の幕屋へ至る進展——を示していることが明らかになります。

「パウロは天を見たが、その栄光について語ろうとして彼がなした最良のことは、あえてそれについて描写しないことであった。彼は、『目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された』（Iコリント2:9）と言っている。だから、あなたが想像力をたくましくし、能力を最大限に発揮して『重みのある永遠の栄光』（IIコリント4:17）を理解し、考えようとしても、あなたの有限な感覚、努力することに弱って疲れている感覚では、それを捉えることができない。なぜなら、先には永遠があるからである。神の御言葉の栄光を明らかにし、その宝を引き出すには、実に永遠という時が必要なのである」（エレン・G・ホワイト『SDA聖書注解』第6巻1107ページ、英文）。

「王の王の住居において、彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々（ダニエル7:10 参照）。輝く守護セラピムが、崇敬のうちに顔を覆うところの、永遠のみ座の栄光に輝く宮に比べるならば、人間の手で造られた建造物は、たとえどんなにりっぱであっても、その壮大さと栄光のかすかな反映にすぎない。しかし、そうはいっても、天の聖所に関する重大な真理と、人間の贖罪のために行われた偉大な働きとは、地上の聖所とその奉仕によって教えられたのであった」（『希望への光』1795、1796 ページ、『各時代の大争闘』下巻126、127 ページ）。

考えてみましょう

- ◆ 神の住まいをはじめ、私たちが想像したり、理解したりするのが難しいことはたくさんあります。しかし聖書は、この住まいが実在のものだ、と述べています。私たちはどのようにすれば、ときとして理解しがたいことであっても、聖書が教えることをすべて信じられるようになるのでしょうか。理解できないときでも、私たちが信じられるようになることは、なぜ重要なのでしょう。（日曜日参照）
- ◆ 私たちは悪に満ちたこの世において、善意、公正、正義といったものを、どのようにすればよりよく示すことができますか。なぜ私たちは、こういったことをしなければならないのですか。（月曜日参照）
- ◆ 私たちがどれほど正義を叫び求めようと、しばしば現時点では正義を目にすることができません。それなのに、なぜ私たちは神の正義を信頼しなければならないのですか。神の約束のほかに、私たちにはどのような希望がありますか。（水曜日参照）



地上における「天」

●暗唱聖句●

「この祭司たちは、天にあるものの写しであり影であるものに仕えており、そのことは、モーセが幕屋を建てようとしたときに、お告げを受けたとおりです。神は、『見よ、山で示された型どおりに、すべてのものを作れ』と言われたのです」(ヘブライ 8:5、新共同訳)

「彼らは、天にある聖所のひな型と影とに仕えている者にすぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受け、『山で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい』と言われたのである」(ヘブル 8:5、口語訳)

今週の聖句

創世記 1:31～2:3、出エジプト記 39:32、43、25:9、ヨハネ 2:19～21、Iコリント 3:16、17、黙示録 21:1～22

安息日午後

今週のテーマ

10月5日

天の聖所は、原初（原型）の聖所であり、神御自身が「私たちのために」働いておられる場所ですが、主はこの聖所に関する真理を、さまざまな方法で地上にいる私たちに示されています。

神は聖所の象徴としてエデンの園を創造なさいました。天の聖所とその救済の機能は、地上の天幕やイスラエルの神殿という、さらに大きな構造物で示されました。

言うまでもなく、その神殿はイエスにおいて人間という形であらわされ、最終的に、天の神殿は新しい地に下ってきます。

これから見ていくように、神は真理を明らかにするために、天の聖所に関係する概念を用いてこられました。私たちは今週の研究において、それらの概念のいくつかを学びます。

聖書を研究する者たちは、エデンの園の特徴の多くが、のちに建設されるイスラエルの聖所と相通じていること、つまり、エデンが地上における最初の象徴としての「神殿」であったことに注目してきました。エデンと聖所の類似点には、次のようなものがあります。

1. 天地創造の物語の最終部分と、荒れ野の幕屋の建設に関する報告の最終部分において、三つの同じ要素——承認、完成、祝福——が同じキーワードで表現されている（創1:31～2:3、出39:32、43、40:33の「すべて」「完成（完了、終えた）」「祝福」という言葉を比較してください）。

2. ちょうど「神が園の中を歩」（創3:8）かれたように、イエスは聖所に住み、御自分の民のただ中におられた（Ⅱサム7:6、7）。

3. アダムはエデンの園を「耕し、守る」（創2:15）ことになっていたが、この二つの動詞が、幕屋におけるレビ人の奉仕に関して用いられている（民3:7、8）。

4. 園を連想させるものが、聖所の至る所に見られる（出25:31～36、列王上6:18）。

5. ケルビムがエデンの園を守り（創3:24）、一対のケルビムが至聖所の中に置かれていた（出25:18～22）。

6. 天地創造に6日間かかり、それぞれの日の説明の冒頭に「神は言われた」という言葉があり、最後に安息日が続いているように、聖所に関する六つの項目の冒頭に「主はモーセに仰せになった（言われた）」（出25:1、30:11、17、22、34、31:1）という言葉があり、[同様の言葉で始まる]安息日に関する七つ目の項目がそのあとに続いている（出31:12～17）。

7. 聖所は、ユダヤ歴の元日に当たる第一の月の最初の日に完成したが（出40:17）、そのことは天地創造におけるこの世界の完成を思い起こさせる。

創世記2章は、こういった類似点をはっきり述べる必要がありませんでした。古代のユダヤ人はそれらを理解していたからです。例えば、紀元前2世紀のユダヤの文書には、「エデンの園は至聖所であり、神の住まいであった」と記されています。

エデンの園は「神（主）の園」（イザ51:3、エゼ28:13、31:9）と呼ばれています。そこは地上における神の住まいであり、私たちの最初の両親が神を礼拝し、神と交わることを目的とした場所でした。それゆえ、墮罪による最大の損失は、アダムとエバが園から追放されたことではなく、神の近くにいられなくなったことだったのです。

月曜日

型の写し

10月7日

問1 出エジプト記 25：9、ヘブライ 8：5、9：23、24 を読んでください。
地上の聖所と天の聖所との間には、どのような関係がありますか。

聖書は、モーセが幕屋を考案したのではなく、彼は山で示された神の指示に従ってそれを建てた（出 26：30、27：8、民 8：4）、と明確に述べています。地上の聖所は「型」に従って建設されなければなりません（出 25：9、40、口語訳）。この「型」に相当するヘブライ語（タブニート）は、「手本」「模型」「写し」といった概念をあらわしています。ですから私たちは、モーセが天の聖所を示す小型の模型のようなものを見て、それを地上の聖所の型として用いたのだ、と結論づけることができるでしょう。

従って、天の聖所が原型であり、イスラエルの聖所の手本なのです。さらに明らかなことは、天の聖所と天そのものは同一視できない、という点です。天の神殿は「天に」（黙 11：19、14：17、15：5）あります。つまり、天が天の聖所を内包しているのであって、両者は同義語ではありません。

ヘブライ人への手紙は、天の聖所が実在するとはっきり説明しています。この天にある聖所が「真の幕屋」（ヘブ 8：2）とか、「更に大きく、更に完全な幕屋」（ヘブ 9：11）とか呼ばれる一方で、地上の聖所は「天にあるものの写しであり影であるもの」（ヘブ 8：5）と呼ばれています。影というものが常に実物をあらわすものにすぎず、不完全で、おぼろげな表象であるように、地上の聖所は天の聖所の単なる象徴にすぎません。しかし、いかなる限界があろうとも、地上の聖所は、天の聖所が実在することを重要な形で反映しているのです。

両者の関係は、予型論的關係と呼ばれています。予型論とは、神が計画された預言的予表のことで、それには対応する二つの歴史的事実——予型（原型）と対型（写し）——が関係します。その対応は予型（原型）から対型（写し）へとなされるので、ヘブライ人への手紙において、モーセが目にした天の手本は「型」（ヘブ 8：5）つまり「予型」と呼ばれ、地上の聖所は「写し」（ヘブ 9：24）つまり「対型」呼ばれているのです。この事実は、天の聖所が地上の聖所よりも先に存在していたという、さらなる証拠を提示します。私たちセブンスデー・アドベンチストは、天の聖所が物理的に存在することを強調するとき、確固とした聖書的根拠に基づいているのです。

問2 ヨハネ 2：19～21 を読んでください。なぜイエスの体は神殿にたとえられているのですか（ヨハ 1：14 も参照）。

ヨハネによる福音書の主題の一つは、より良い「神殿」がイエスとともにやって来た、というものです。幕屋の比喩が、早くもヨハネ 1：14 に出てきます。イエスは人間の中に「宿られた」言葉であり、人間はその「栄光」を見た、というのです。ここで「宿られた」という意味で用いられているギリシア語（スケノオー）は、「幕屋」（スケネー）に相当するギリシア語の名詞を動詞形にしたものなので、14 節は「わたしたちの間に幕屋となられた（人間として住まわれた）言葉」と訳すこともできます。このような文脈で読むと、「栄光」という言葉は、荒野の幕屋（出 40：34、35）や、献堂式の際にソロモンの神殿（代下 7：1～3）を満たした神の栄光を思い起こさせます。このようにキリストは、人間として地上においでになったとき、御自分の民の間に住むという、神の神殿の約束を成就されたのでした。

これらの聖句が示すように、イエスは、御自分が神殿である、と宣言なさいましたが、そのことは、彼が死んだのちに地上の神殿の重要性が失われることを意味していたのです（ヨハ 2：19～21、マタ 27：51 参照）。またイエスは、御自分が命のパン（ヨハ 6：35）、世の光（ヨハ 8：12）である、と言われましたが、そのとき彼は、机の上のパンではなく、地上の聖所の備品であった御臨在のパンと燭台を指しておられたのかもしれませんが。またイエスは、「世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハ 1：29）と呼ばれていますが、その言葉は明らかに聖所に言及したものです。

「聖所に関係する奉仕に携わった者たちはみな、人類のためのキリストの執り成しについて、絶えず教育を受けていた。このような奉仕は、すべての人の心に、神の王国の律法である神の律法に対する愛を生じさせるように意図されていたのである。犠牲の^{ささげ}物^{もの}は、キリスト——人間が犯した罪を背負って、苦しみつつ死んでいくいけにえ、私たちのために罪とされた無垢^{むく}なお方——によってあらわされる神の愛の実物教訓となるべきものであった」（『セレクトッド・メッセージ』第 1 巻 233 ページ、英文）。

水曜日

聖所としての教会

10月9日

キリストが昇天され、天の聖所の大祭司に就任なさったあと、もはや地上の神殿には、救済計画における真の目的がなくなりました（マタ27:50、51参照）。しかし、それでも神は地上の御自分の民の間に住もうとなさり、今やそれは聖霊によって可能でした。使徒たちはこの真理を伝えるために、神殿の比喻を用いています。

問3 Iコリント3:16、17、6:19、20、IIコリント6:16、エフェソ2:19～22を読んでください。これらの聖句の中に出てくる聖所の比喻に注目しましょう。聖書はここで、どのような真理を私たちに教えていますか。

パウロはIコリント3:16、17において、一つの集合体としての教会に語りかけ、教会が神の神殿であり（16節）、神殿は聖なるものである（17節）という主題を提示しています。また、Iコリント6:19、20では、同じ原則を個々の信徒に適用しています。神殿として、信徒は聖域であり、そのようなものとして聖く生きるべき天与の義務を負っているのです。パウロは聖所の比喻を用いて、清く聖なる生活を送るようにとの要求を強調していますが、ここでの清く聖なる生活とは、不品行に対して性的に純潔であることです（Iコリ6:15～18）。教会が神の聖所であるというパウロの先の言及は、この考え方に合致します。信徒と信徒でない人との間に、共通点はありません（IIコリ6:14～7:1）。なぜなら、教会は神との契約関係の中にあり、それゆえに神のものだからです（IIコリ6:18）。

同時に、教会は神の神殿であるとともに、聖なる祭司でもあります（Iペト2:5、9）。当然ながら、このような特権には重要な責任が伴います。私たちが信仰によって人生を主におさげし、多く与えられたがゆえに多くお返しすることを求めておられる主に従うことが、とても重要です。

◆ 言うまでもなく、私たちはキリストの義によって救われ、その義が私たちを完全に覆っています。しかし、キリストの恵みによって与えられたもののゆえに、神は、私たちがお返しすることを求めておられます。どのようなものを求めておられるのでしょうか。そして、それ以上に大切なことですが、私たちはどのようにすれば、そのために最善を尽くせるのでしょうか。

問4 黙示録7：15～17を読んでください。^{あがな}贖われた者たちは、どこにいますか。また、これらの聖句は彼らをどのように描いていますか。

次の聖句は、贖われた者たちを神の王宮や神殿で働く王や祭司として描いています（黙1：6、5：10、20：6）。「玉座に座っておられる方が、この者たちの上に幕屋を張る」（黙7：15）という約束は、荒れ野の幕屋（聖所）——神が指導者として古代イスラエルの中に住まれた場所——における神の御臨在をほのめかしています。聖所は新しい地において、神と贖われた者たちとが会う、最適の交わりの場に再びなるのです。そこでは、神とキリストの御臨在のもと、安全、保護、そして充実した究極の生活が保証されています。かつて人間の間に宿られた方が（ヨハ1：14）、今や聖なる者たちの上に幕屋を張り、彼らは神の住まいに「宿る」のです。

問5 黙示録21：1～22を読んでください。新しいエルサレムがどのように描かれていますか。これらの聖句の中で、聖なる都と聖所との間に、どのような類似点がありますか。

ヨハネは新しいエルサレムの中に神殿を見ていませんが（黙21：22）、このことは、神殿がなかったことを意味しているわけではありません。そうではなく、新しいエルサレムそのものが神殿であり、「神の幕屋」（黙21：3）なのです。聖所の特徴のいくつかは、新しいエルサレムに見られます。それは、天を起源とする「聖なる」場所で（黙21：2、10）、至聖所と同じく立方体の形をしており（黙21：16、王上6：20）、「汚れた者」が入れない神殿の境内^{けいだい}に似ており（黙21：27）、何よりも重要なことに、神がおられる場所なのです。神の聖所の中で、私たちは最高に親密な関係を神と持ちつつ、ともに生きることができます（黙21：3、7）。これこそが、救済の目的なのです。

◆ 神との親しい交わりの中での「永遠」とは、どのようなものでしょうか。エレン・G・ホワイトが繰り返し言っているように、今「神と親しく歩むこと」は、私たちにとってなぜ重要なのですか。

金曜日

さらなる研究

10月11日

『教育』352～361ページ、『希望への光』1928～1930ページ（『各時代の大争闘』下巻460～467ページ）。

「未来の嗣業をあまりにも物質的なものに思わせはしないかとの恐れから、それをわれわれの住まいとして見るようにと教えられている真理そのものを霊的なものにしてしまう人が多い。

キリストは弟子たちに、わたしはあなたがたのために父の家に住むところを備えに行くのだとはっきり言われた。神のみ言葉の教えを受け入れる者は、天の住まいについて全く無知ではない。しかもなお、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである（Iコリント2：9）。人間の言葉では、義人の受ける報いを十分に描写することはできない。それは見るものだけがわかるであろう。限りある人知では、神のパラダイスの栄光を理解することができない」（『希望への光』1929ページ、『各時代の大争闘』下巻463ページ）。

— 考えてみましょう —

- ◆ 「聖所（聖域、逃れの間）」という言葉について、じっくり考えてみてください。どのようなことが思い浮かびますか。現在のあなたにとっての「聖所」は、何（どこ）ですか。こういった地上の聖所についてのあなたの理解は、神の聖所が私たちに提供してくれるものをよりよく理解するうえで、いかに助けとなりますか。（日曜日参照）
- ◆ 私たちの罪深い性質のゆえに、神は私たちに怒っておられる、とすぐに考えてしまいます。イエスの生涯と死に見られるような神の愛の啓示は、私たちが自分の過ちにもかかわらず、個人的レベルで神の愛を実感するのに、いかに役立つでしょうか。このような実感によって、私たちはいかに自己に勝利する力を得られるのでしょうか。（火曜日参照）

話し合いのための質問

- 1 「聖所」としての教会という考え方について、クラスでじっくり考えてみてください。あなたはこの真理を、どのように理解しますか。一つの教会として、私たちはこの重要な教えをいかに実行することができるでしょうか。



犠 牲

●暗唱聖句●

「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」

(ローマ 12：1、新共同訳)

「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である」

(ローマ 12：1、口語訳)

今週の聖句

創世記 3：9～21、出エジプト記 12：21～27、レビ記 2：1～3、
創世記 22：1～19、レビ記 17：10、11、フィリピ 4：18

安息日午後

今週のテーマ

10月12日

福音全体の中心に犠牲の概念があります。聖書の用語の中で、「犠牲」に相当する言葉は、神に近づくとか、神のもとへ何かを持っていくとかいったことをしばしば意味します。つまり、「献げ物」「供え物」「犠牲」「いけにえ」に相当するヘブライ語の基本的な意味は、近づく行為や、神の御臨在のもとへ何かを持っていく行為なのです。これに相当するギリシアは「贈り物」を意味し、犠牲を差し出すことをあらわしています。

同様に、「献げ物」を意味する英語の「オファリング」は、贈り物をするという意味のラテン語「オフエーレ」に由来します。「犠牲」に相当するラテン語は、「サーチュエル（聖なる）」と「ファチュエーレ（作る、する）」という言葉を組み合わせたもので、何かを聖くする行為を指しています。

私たちは今週の研究において、信者が神にささげてきた犠牲のいくつかに目を向けます。そして、神が常に犠牲を求めてこられたこと、今日もなお求めておられることを知るでしょう。

しかし言うまでもなく、最も重要な点は、神が究極の犠牲を、つまり御自身を人間イエスという形でおささげになったことです。

日曜日

最初の犠牲

10月13日

問1 創世記3：9～21を読んでください。アダムとエバが罪を犯したあと、神はどのように応じられましたか。

アダムとエバは、完璧な世界、聖所のような園に住み、神は彼らに、創造主と直接交わることをお許しになっていました。しかし、彼らの最初の罪が神とのその関係に、ほとんど克服しがたい亀裂を生じさせたのです。ところが、神はそのような信頼の破壊に対する対処法をすでに考えておられ、彼らに裁きが下る前にもかかわらず、救い主という希望をお与えになりました（創3：15）。

「アダムとエバは、罪が招いた判決を待ちながら、神の御前に犯罪者として立った。しかしふたりが、茨やあざみ、味わうべき悲しみや苦悩、帰すべき塵^{ちり}のことを耳にする前に、彼らに希望を抱かせたに違いない言葉を聞いたのである。彼らは苦しまなければならないが、……最終的に勝利を期待してもよいというのだ」（エレン・G・ホワイト『キリストを知るために』16ページ、英文）。

主は裁きの言葉を述べられた直後に、彼らの裸と恥を覆うための皮の衣を作ることで、その勝利の最大の根拠をお示しになりました。記されてはいませんが、このために罪のない動物が死ななければならず、それは犠牲と理解されたであろうと考えることは、妥当でしょう（創3：21）。

犯罪者に服を与えるという神の行為は、象徴的な行為になりました。荒れ野の聖所が神と神の民との特別な関係を保証したように、エデンの園で服を着せたことは、彼らに対する神の変わらぬ^{あわ}憐れみを請け合ったのです。

このように人類史の初期から、犠牲は、罪深い人間が神と結びつくことができると教えていましたが、それは犠牲に予表されるイエスの死を通してのみ可能でした。

◆ 創世記3：9～21を読んでください。神は有罪の夫婦に裁きの言葉を伝える前に、「最終的な勝利」を約束なさいました。このことは、あなたにどのようなことを教えてくれますか。また、私たちは墮落した状態にありますが、そのような私たちに対する神の態度について、このことは何を物語っていますか。

旧約聖書の時代、信者はさまざまな機会に、さまざまな個人的都合に応じて献げ物をささげました。ささげることが認められていた物としては、清い動物、穀物、ぶどう酒……などがありました。動物の犠牲は、聖所の務めにおける最も古い要素で、祭司の奉仕とともに、それはイスラエルの人々の奉仕の中心でした。犠牲のない宗教生活は、考えられなかったのです。

問2 次の聖句には、どのような種類の献げ物が記されていますか（出12：21～27、レビ2：1～3、出25：2～7、レビ4：27～31）。

神が犠牲制度を設けられたのは、信者が神との親しい関係に入れるようにするためでした。それゆえ、あらゆる機会に——感謝をささげるため、喜びをあらわすため、赦しの嘆願をするため、懺悔^{ざんげ}の訴えをするため、贈り物として、献身や償いの象徴として——献げ物をささげることができました。

最も重要な種類の献げ物としては、焼き尽くす献げ物（レビ1章）、穀物の献げ物（レビ2章）のほかに、和解の献げ物（レビ3章）、贖罪の献げ物（レビ4章）、賠償の献げ物（レビ5：14～6：7）などがありました。最初の三つは自発的な献げ物で、ささげる者に、その人の立場、職業、能力、持ち物など、すべては最終的に神に属していることを思い起こさせるためのものでした。焼き尽くす献げ物は、献げ物をする人の全的な献身を象徴しています。穀物の献げ物は、それが食べ物であれ、動物であれ、私たちの物質的所有物を神におささげすることを象徴しています。和解の献げ物は、ささげる人が自分で食べるためにその一部を受け取る唯一の献げ物です。

残りの二つの犠牲は義務的なもので、悪事には結果が伴うものの、悪事を行う者でも「癒される」ことを思い起こさせるためのものでした。贖罪の献げ物は、儀礼的な汚れのあとや、だれかが罪のために汚れたと気づいたあとにささげられました。

◆ 献げ物の持つ幅広い役割は、私たちの生活があらゆる面で神の支配のもとになければならないことを示しています。あなたの立場、職業、能力、持ち物などすべてを、どのようにしたら神におささげできるでしょうか。あなたがそうしないとき、どうなるでしょうか。

火曜日

モリヤでの犠牲

10月15日

問3 創世記 22：1～19 を読んでください。アブラハムは犠牲について、どのようなことを学びましたか。

神は信じがたい方法でアブラハムの信仰を試みられましたが、その目的は何だったのでしょうか。神とともに歩むこの族長の人生には、神の約束——土地、子孫、数々の祝福に関する約束、息子に関する約束、神がイシュマエルの面倒を見てくださるという約束など——が常に伴っていました。アブラハムは犠牲を払いましたが、それは常に何らかの約束のもとでのことだったのです。しかし、創世記 22 章に記されている状況では、神の約束がまったく与えられていません。それどころか彼は、生きている約束である息子をささげよ、と言われたのです。アブラハムは神の御命令を遂行することで、神が他のいかなるものよりも大切であるということを示しました。

「神が、アブラハムにその子を殺すように命じられたのは、アブラハムの信仰をためすとともに、彼の心に福音を現実的に強く印象づけるためでもあった。あの恐ろしい試練の暗黒の数日間の苦悩は、人類の贖罪のために払われた無限の神の大犠牲を、アブラハムが自分の体験によって学ぶために神が許されたのである。自分のむすこを捧げることほど、アブラハムの心を苦しめた試練はなかった」（『希望への光』76 ページ、『人類のあけぼの』上巻 161 ページ）。

犠牲に関して、アブラハムは二つの根本的な原則を理解しました。第一の原則は、真の犠牲と救済の手段をもたらすことができるのは、神御自身だけであるということです。それらを提供する者、提供しなければならない者は、主御自身なのです。アブラハムはその場所を「ヤーウェ・イルエ」（主は備えてくださる）と名づけることによって、この原則が永遠に失われないようにしています。第二の原則は、実際の犠牲は代理のもの、イサクの命を救うものであるということです。あの雄羊はイサクの「代わりに」（創 22：13）ささげられました。神が備えられたあの動物は、神の小羊、つまり神が「わたしたちの罪をすべて……負わせられた」（イザ 53：6、使徒 8：32）ところのイエス・キリストを予表していたのです。

レビ記 17:10、11 を読んでください。いかなる血も食べてはならないと、神がイスラエルの人々にお命じになったこの箇所で、なぜこのような禁止をするのか、興味深い理由が述べられています。血は命の象徴であり、神は犠牲の血を人間の命の代償となさったからだ、ということです。血によって象徴される一つの命が、もう一つの命を買い戻すのです。モリヤの山で、アブラハムが息子の血の代わりに雄羊の血をささげたときにはっきりした「身代わりの原則」が、古代イスラエルに対する神の法的要求の中にしっかりとどまっています。

創世記 22 章で、贖^{あがな}いの手段を提供するのは自分である、と神がお示しになっているように、ヘブライ語において、「わたしが血をあなたたちに与えた」（レビ 17:11）と、「わたし」という言葉が強調されています。私たち人間は自分の代償を用意することができません。神がそれを提供されねばならないのです。

このような考え方は、犠牲を用いる他の宗教の考え方とは異なります。聖書によれば、神に近づき、神のなだめ方を知っているのは、人間ではなく、神です。聖なる御臨在の前へ進み出る手段を人間にお与えになる神なのです。そしてキリストにおいて、神御自身が代償の血を提供されます。

問4 サムエル記上 15:22 とミカ 6:6～8 を読んでください。犠牲制度に潜む危険は何ですか。

神は、犠牲による奉仕を心のあり方に代わるものにしようなどと、まったく意図なさいませんでした。それどころか、犠牲は信じる者の心を主に開かせるためのものだったのです。もし私たちが、犠牲は神と私たちとの霊的関係をあらわすものであり、あらゆる犠牲ははるかに大きな犠牲であられるイエス・キリストを指し示しているという事実を見失うなら、私たちは犠牲制度を贖^{あがな}いのための自動装置であるかのように、たやすく誤解してしまうでしょう。神は犠牲とともに、私たちの心が神とともにあることを強く望んでおられるのです（詩編 51:18、19）。ですからイスラエルの預言者たちは、偽の信心深さを持つ人々を絶えず非難し、「正義を行い、慈しみを愛し／へりくだって神と共に歩む」（ミカ 6:8、イザ 1:10～17 と比較）ように、と求めたのでした。

木曜日

今日の犠牲／生けるいけにえ

10月17日

キリストが犠牲的な死を遂げられたのち、動物のいけにえはもはや不要になったにもかかわらず、新約聖書は別の種類の犠牲が必要だと語っています。

問5 次の聖句によれば、私たちは今日、どのような種類の献げ物を神の前に携えて行かなければなりませんか（ロマ 12：1、2、フィリ 4：18、ヘブ 13：15、16、I ペト 2：5）。

犠牲制度に関する言葉は、神にすべてをささげた生活を送るという概念を初期のクリスチャンたちがイメージするうえで、とても有効でした。実際、パウロが自分の殉教の死について考えていたときでさえ、彼は自分自身を「注ぎの供え物」（フィリ 2：17、II テモ 4：6、新改訳）と表現しています。

ローマ 12：1 には、具体的メッセージが含まれています。「生けるいけにえ」とは、人を丸ごと神におささげする、という意味です。それには、体をささげること（ロマ 12：1）、心のあり方が変えられることも（2 節）含まれます。神にお仕えするという唯一の目的のために、私たちは分離（聖別）されなければなりません。クリスチャンは自分自身をすっかり神におささげしますが、それは、ローマ 12：1～11 に記されているように、キリストを私たちのいけにえ、私たちの救いの手段として提供してくださった「神の憐れみ」のゆえなのです。

パウロはこのような文脈の中で、キリストをまねなさい、とクリスチャンたちに訴えています。神の恵みを真に理解することで、神にささげられた生活、他者への愛情深い奉仕が実現するのです。自己と自己の欲望とを神の御旨に従わせることが、キリストという私たちのための究極の犠牲に対する、唯一ふさわしい応答なのです。

つまるところ、霊的、教理的真理に対する私たちの理解と、他者への私たちの奉仕とは、調和していなければなりません。信者の生活のあらゆる側面が、神に対する純粋な献身をあらわしていなければならないのです。真の礼拝は、内的かつ霊的であるばかりでなく、無私無欲な奉仕という外的行為も含まなければなりません。要するに、主が私たちのために何を成し遂げてくださったのかを考えてみてください。

「天の指揮者、神のみ子が、罪人のために死ぬ必要があるという贖罪の神秘は、天使でさえも理解に苦しんだ。アブラハムに、その子を捧げよという命令が与えられたときに、全天の関心がそれに注がれた。彼らは、緊張して、この命令が実行される段階を見守った。『燔祭はんさいの小羊はどこにありますか』とイサクがたずねたとき、アブラハムは、『神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう』と答えた。父が今にもむすこを殺そうとした時、彼の手がとめられて、神が備えられた雄羊がイサクに代わって捧げられた時に、贖罪の神秘が明らかに照らし出されて、人類のための神の驚くべき準備が、天使たちにさえ明瞭に理解されたのである（Iペテロ1:12 参照）」（『希望への光 76』 ページ、『人類のあけぼの』 上巻 162 ページ）。

— 考えてみましょう —

- ◆ アブラハムにとってモリヤの山での体験がどのようなものであったのか、だれが想像できるでしょうか。あなたが純粋な信仰から、ひどく苦しいことをしなければならなかったときのことを、思い出してみてください。あなたはその行動から何を学びましたか。その教訓はどのように生きていますか。（火曜日参照）
- ◆ 私たちも、犠牲制度を誤解するのと同じような危険に遭遇します。私たちは、古代のイスラエルの人々が行っていたのと同じことをしている自分に気づくのが、なぜ難しいのでしょうか。どうすればこのような過ちを避けることができるでしょうか。（水曜日参照）

話 し 合 い の た め の 質 問

- ① 今週の研究で見たように、イスラエルの人々が直面した大きな問題の一つは、犠牲制度を目的——神にすべてをおさげした生活、他者への愛情深い奉仕としておのずとあらわれる神への献身——への手段とみなさず、犠牲制度そのものを目的とみなしたことでした。（多くの光を与えられている）セブンスデー・アドベンチストは同じ道をたどる危険性の中にありますが、私たちは今、自分たちの持っている大いなる真理が目的への手段ではなく、目的それ自身だと思っていないでしょうか。

第4課

10月26日



聖所から得られる教訓

●暗唱聖句●

「わたしのための聖なる所を彼らに造らせなさい。わたしは彼らの中に住むであろう」 (出エジプト記 25：8、新共同訳)

「また、彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである」 (出エジプト記 25：8、口語訳)

今週の聖句

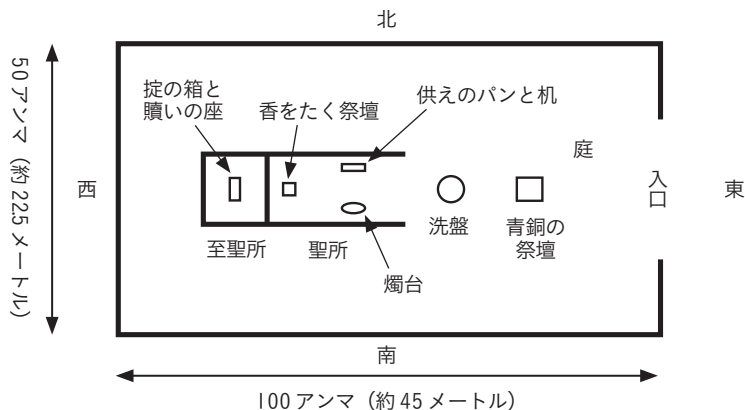
出エジプト記 40：9、レビ記 19：2、Iペトロ 1：14～16、
出エジプト記 31：2～11、ローマ 3：25～28、
列王記上 8：31～53、詩編 73：1～17

安息日午後

今週のテーマ

10月19日

聖所は、神が私たちに福音の意味を教えるために考案された重要な道具の一つです。今週の研究を進めるうえで、下の図が役立つでしょう。



今週は、地上の聖所から得られる主要な洞察のいくつかに焦点を合わせます。犠牲制度については、あとで学びます。

問1 出エジプト記 25：8 によれば、荒れ野における地上の聖所（幕屋）の目的は、何でしたか。どのような驚くべき真理が、私たちに対する神の愛を教えていますか。

エデンの園で、神と人間との直接的な関係を破壊したのは、罪でした。罪が私たちの最初の両親から、神との妨げなき交わりを奪ったのです。しかし創造主は、それでも人間を御自分のもとへ引き寄せ、墮落した彼らと深い契約関係を楽しみたいとお望みになり、その過程をまさにエデンにおいて始められました。何百年もあとのこと、神はイスラエルをエジプトから救い、聖所と犠牲制度を設けることで、再び率先して人間を御臨在のもとへ連れ戻されたのです。

このように聖所は、御自分の民の中に住みたいという、神のやむにやまれぬ願いを物語っています。これは神のお考えです（詩編 132：13、14）。神の究極の目的は関係であり、聖所は、そのために神がお選びになった手段でした。聖所は、神が地上の御自分の民とともにおられるという具体的な証拠なのです。

民数記 2 章の記述から、幕屋が宿営の中央——古代中近東において、通常、王が自分の天幕を張った場所——に位置していたことは明らかです。そのように幕屋は、神がイスラエルの王であることを象徴していました。

一方、レビ人はその幕屋の周囲に自分たちの天幕を張り（民 1：5）、ほかの部族は三つずつグループで、その周りに「距離」を置いて宿営したのです。このことは、神との近さ（遠さ）を具体的な形で示しています。

聖所のもう一つの目的は、神が制定された礼拝制度の中心地となることでした。神が民の中に御臨在なさることは、彼らの汚れと道徳的欠陥によって危険を招くので、神はいけにえと^{ささげ}物^{もの}の制度を与え、その制度によって、聖くない民が聖い神の御前で生き続けられるようになさいました。

このような背景の中で、聖所は救済計画に関する詳細を明らかにしていたのです。それには、犠牲だけでなく、救済計画に不可欠な要素である祭司の働きも含まれていました。

月曜日

「あなたがたは聖なる者となれ」

10月21日

「次に、あなたは聖別の油を取って、幕屋とその中のすべてのものに注ぎ、幕屋とそのすべての祭具を聖別する。それは聖なるものとなる。次いで、焼き尽くす献げ物の祭壇とそのすべての祭具に油を注ぎ、祭壇を聖別する。祭壇は神聖なものとなる」(出エジプト記 40:9、10)。

この聖句は私たちに、聖所が「聖なるもの」とみなされなければならないことを教えています。「聖」の基本概念は、神への帰属に伴う「分離」と「独自性」です。

「その典型的な奉仕は、神とイスラエルとをつなぎとめることであった。いけにえの献げ物は、キリストの犠牲を予表し、それによって来るべき^{あがな}贖い主への揺るぎない信仰を人々の心の中に保つことを意図していた。それゆえ、主が彼らのいけにえを受け入れ、彼らとともにあり続ける一方で、人々が救済計画に対する正しい知識を持ち、彼らの義務を正しく理解するために最も重要なのは、心の聖さと生活の清さ、神に対する畏敬、神の御要求に対する完全な服従が、聖所に関係するすべての者によって維持されることであった」(エレン・G・ホワイト『SDA聖書注解』第2巻1010ページ)。

問2 レビ記 19:2 と I ペトロ 1:14～16 を読んでください。人間が「聖なる者」となる第一の理由は何ですか。

神の聖さは私たちを変え、私たちを分離します。その聖さが、あらゆる生活の領域において——食べ物に関する規定であれ(レビ 11:44、45)、祭司を敬うことであれ(レビ 21:8)、「無知であったころの欲望」(I ペト 1:14)に従わないことであれ——、神の民の道徳的行為における根本的動機なのです(レビ 19 章)。明らかに神は、私たちが神に近づくにつれて、聖さのうちに成長することを望んでおられます。このような変化は、私たちの罪深い性質を捨て去り、結果がどうであれ、正しいことをしようという意欲によってのみ生じるのです。

◆ あなた自身や、あなたの習慣、趣味、活動などについて、考えてみてください。あなたの状態、あなたのすることは、どの程度「聖い」と思いますか。この種の質問は、答えるのが難しいですよ。

問3 出エジプト記 31:2～11 を読んでください。これらの聖句は、地上の聖所の祭具を作ることにに関して、どのようなことを教えてください。創世記 1:2 と、どのようなつながりがあるのでしょうか（出 25:9 も参照）。

聖所のあらゆる祭具の中で、掟おきての箱は神の御臨在と聖さを示す最高の象徴でした。その名前は、箱の中に納められていた（出 25:16、21）「掟の板」（出 32:15、16）と呼ばれる二枚の律法の石板に由来します。

箱の上部には「慈悲の座」が蓋として置かれ、一對のケルビムが翼でそれを覆っていましたが（出 25:17～21）、それは「贖いの座」（口語訳「贖罪所」、新改訳「贖いのふた」）と呼んだほうがふさわしいものでした。というのも、それは、情けと慈悲に富まれる私たちの神が、御自身と民とを和解させ、契約関係を維持するために一つひとつの戒めを設けられた、という考えを伝える物だったからです。

この場所で、年に一度の贖罪日（ヨム・キプール）に、人々と聖所のための贖いが行われました（レビ 16:14～16）。パウロはローマ 3:25 において、イエスのことを「贖いの蓋」（通常は、「罪を償う供え物」「あがないの供え物」「なだめの供え物」などと訳される）と呼んでいます。イエス御自身が贖いの場であり、神はイエスを通して私たちの罪の贖いをなさったからです。

幕屋の最初の部屋である聖所では、燭台から常に光が放たれ（レビ 24:1～4）、香をたく祭壇からは、神の御臨在を祭司の目から隠す香煙が立ち昇っていました（レビ 16:12、13）。供えのパンのための机には、イスラエルの12部族をあらわす12のパンとともに、皿、柄杓ひしゃく、小瓶びん、水差し（出 25:29、30）なども置かれました。これらの品の重要性について、情報はほとんどありませんが、契約の食事（出 24:11）の要素「パンやぶどう酒」を象徴し、民と交わされた神の契約を常に思い出させるものとして役立っていたようです。

◆ ローマ 3:25～28 を読んでください。「律法の行いによるのではなく、信仰による」救いという約束から、私たちはどのような大いなる希望を得ることができますか。

水曜日

共同体の聖なる活動の中心地

10月23日

問4 列王記上8:31～53を読んでください。これらの聖句は、聖所の機能について、さらにどのようなことを教えてくれますか。

ソロモン王は新しく建てられた神殿の献堂式において、七つの具体的な事柄に関する祈りをささげました。その七つの機能は、イスラエルの人々の生活の中における神殿の幅広い役割を具体的に示しています。神殿は、赦しを求める場所（30節）、誓いを立てる場所（31、32節）、敗北したときに哀願する場所（33、34節）、飢饉^{ききん}やその他の災害が襲ってきたときに嘆願する場所（35、36、37～40節）でした。そこはまた、異国人が祈る場所（41～43節）であるとともに、戦いの勝利を嘆願する場所（44、45節）でもあったのです。

神殿が「すべての民の祈りの家」（イザ56:7）となるように意図されていたことは、ソロモンが嘆願する者としてイスラエル人も、異国人も、つまりすべての人を想定している事実から明らかです。

問5 聖所は基本的に、イスラエルにおけるあらゆる活動の観念上の中心地でした。宗教は信者の生活の一部でも、大部分でもなく、すべてだったのです。このことは、私たちの信仰が日々の生活の中で果たすべき役割について、どのようなことを私たちに教えてくれますか。

人々は助言や判断を仰ぎたいと思ったとき、あるいは自分の罪を悔いたとき、聖所へ行きました。聖所は、荒れ野での年月の間、生活の拠点でもあったのです。神は御自分の民に何かを伝えたいと望まれたとき、聖所からそうなさいました（出25:22）。それゆえ、聖所が「会見の幕屋」（レビ1:1ほか、口語訳）と呼ばれたのは、ふさわしいことでした。

◆ あなたの祈りの生活について考えてみてください。それは深く、豊かで、信仰を肯定し、生活を変えるようなものですか。おそらく、あなたが最初に自問すべきは、「どれくらいの時間を、私は祈りに用いているだろうか」という問いでしょう。

詩編は繰り返し、信者と神との関係において、聖所が重要な役割を果たしている、と述べています。ダビデが詩編 23 編の最後に表明した、「わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう」(6 節、口語訳) という確信は有名です。詩編 27 編における彼の最大の願いは、聖所において最も体験できる場所のヤーウエの前にいることなのです。ダビデは、自分が聖所をどれほど大事にしているかを示すために、「主の家」「宮」「幕屋」など、幅広い表現でそれに言及しています。人が瞑想し、主の麗しさを仰ぎ見(る) (詩編 27:4、新改訳) ことができるのは、そこにおいてなのです。

聖所における神の活動は、いくつかの重要な点を説明しています。神は、礼拝する者を守り、御自分の聖所にかくまわれるのです(詩編 27:5)。神は堅固な隠れ家を与え、神の御臨在のもとへやって来るすべての者に心の平安を請け合われます。これらの表現は、主が御自分の民のためになされることと主の麗しさを結びつけています。加えて、象徴的な重要性を持つ聖所の務めは、神の慈悲と正義を示しているのです。

ダビデの心の奥底にある望みの最終的な目標は、単に聖所の中にいることではなく、ヤーウエのためにヤーウエとともにいることでした。それゆえ、彼は神を「尋ね求め」(詩編 27:4、8) ようと心に決めているのです。

問6 詩編 73:1～17 を読んでください。聖所に入ったあと、アサフはどのような洞察を得ましたか。

アサフは詩編 73 編で、苦しみという問題と格闘しています。彼は、神に忠実な者たちが苦しんでいる一方で、神に逆らう者たちが一見成功しているように見えることが納得できません(4～12 節)。アサフ自身が道を踏み誤りそうになっていましたが(1～3 節)、聖所に入ったことで変化が生じます(13～17 節)。彼はその場所で、ダビデが詩編 63:2 で述べているのと同じ神の力と栄光を目にして、現状はいつの日か変わり、公平な裁きがなされるとわかったのです。彼は改めてこの真理について深く考え、結局、神に逆らう者たちは滑りやすい道にあり(18～20 節)、忠実な者たちは安全なのだ(21～28 節) と再確認できたのでした。神を「尋ね求める」者たちにとって、聖所は確信を得る場所、人生の要塞となり、神はその場所で彼らを「岩の上に立たせ」(詩編 27:5) てくださるのです。聖所の務めが教える真理を通じて、私たちは神の慈悲と正義に信頼できるようになります。

金曜日

さらなる研究

10月25日

『希望への光』175～182 ページ（『人類のあけぼの』上巻 405～423 ページ）。

「聖所の建築には、多額の費用を要する準備が必要であった。貴重で高価な材料が、大量になければならなかった。しかし、主は、心からの捧げ物だけをお受けになった。モーセは『すべて、心から喜んでする者から、わたしにささげる物を受け取りなさい』という神の命令を民に伝えた（出エジプト 25：2）。まず初めに神への献身と犠牲の精神が、いと高き者のすみかを造るために要求された」（『希望への光』175 ページ、『人類のあけぼの』406 ページ）。

— 考えてみましょう —

- ◆ この宇宙の創造者、すべてをお造りになった方は（ヨハネ 1：1～3 参照）、聖所を用いて御自分を低くし、荒れ野をさまよう者たちの中にお住みになりました。この事実だけでも、私たちがだれかに対して民族的、階級的、文化的差別を心に抱くのを、いかに防ぐ助けとなるでしょうか。（日曜日参照）

話し合いのための質問

- 1 神の正義という問題について、じっくり考えてみてください。私たちがこの世で正義を目にすることは、滅多にありません。神の正義という最終的な希望がなければ、なぜ正義の見込みがまったくないのですか。
- 2 ある人が次のように記しています。「幕屋は、道に迷った世界の真ん中にある聖なる一区画の土地である」と。あなたにとって、この言葉はどのようなことを意味しますか。
- 3 I ペトロ 1：14～16 を読んでください。あなたは神の聖さをどのように理解していますか。あなたにとって、あなた自身が聖いということは、どのようなことを意味しますか。どのようにしたら、私たちは聖くなれますか。
- 4 祭司エリの息子たちは、神の近くにいらながら、神の聖さに対する感謝を忘れた人々の事例です（サム上 2：12～17）。神が聖い方だという感覚を忘れないためには、どうしたよいでしょうか。祈り、聖書研究、従順は、神の聖さに対する認識を保つために、なぜ重要なのですか。



贖罪しよくざい —— 清めささの献げ物

●暗唱聖句●

「知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖あがなわれたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです」

（I ペトロ 1：18、19、新共同訳）

「あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」（I ペトロ 1：18、19、口語訳）

今週の聖句

歴代誌下 33：12、サムエル記下 14：1～11、
レビ記 4：27～31、エレミヤ 17：1、
レビ記 10：16～18、ミカ 7：18～20

安息日午後

今週のテーマ

10月26日

おそらく、いけにえの動物を屠ほふることは聖所の務めの中でいちばん大切な部分でしょう。なぜなら、それはキリストの犠牲を直接的に指し示しているからです。罪人のために死ぬ動物の血は、私たちのために死なれたキリストの血の象徴でした。

私たちは今週の研究において、「清めの献げ物」（「贖罪の献げ物」とも呼ばれる）——真の犠牲であられるイエス・キリストを通して、神がいかに私たちと和解なさろうとしておられるのかを私たちにわからせるための、神によって指定された方法——に関連するいくつかの概念について学びます。今週の研究では、時折、「贖罪の献げ物」という言葉の代わりに「清めの献げ物」という言葉を用いますが、その理由は、例えば、産婦がこの献げ物をささげなければならなかったことから、出産は道徳的な過ちなのだ、といったような印象を与えないためです。この際の献げ物は、罪のゆえの犠牲ではなく、産婦の儀礼的な汚れに対する清めの献げ物と理解すべきなのです。

日曜日

罪と^{あわ}憐れみ

10月27日

主を知る者であれば誰もが、罪は私たちを神から引き離す、と証しすることができます。うれしいことに、主は罪によって生じた亀裂を修復し、私たちを彼のもとへ連れ戻す制度を導入されました。そして言うまでもなく、この制度の中心にあるのが犠牲なのです。

旧約聖書の中に描かれている罪は、基本的に三種類あり、それぞれが罪を犯した者の自覚の度合いに応じています——故意でない過失の罪、意図的な故意の罪、そして反抗の罪。レビ記 4:1～5:13 に記されている清めの献げ物は、過失の罪と、ある種の故意の罪（レビ 5:1）に適用されました。これら二つの種類の罪には献げ物が利用できましたが、最も悪質な反抗の罪には献げ物の記述がありません。反抗の罪は、尊大にも神の「面前で」行われるもので、反抗する者は絶たれるしかありませんでした（民 15:29～31）。しかし、この種の罪の場合でも、例えばマナセのように、神が赦されることもあったようです（歴代下 33:12、13）。

神は罪人を赦しても差し支えないのでしょうか。結局のところ、罪人は正しくないのですから、有罪の判決を受けるに値するのではないのでしょうか（申 25:1 参照）。

テコアの女の物語は、その答えを教えてください。ヨアブの指示に従い、彼女はやもめのふりをしてダビデ王のもとへ行き、裁きを求めました。2 人の息子がいて、1 人がもう 1 人を殺してしまったという、ヨアブの創作した話に対する判断を仰ぐためです。イスラエルの律法は、たとえ殺人者がその一家に残された唯一の男性であったとしても、彼に死刑を要求していました（民 35:31）。女は（裁判官の役割を果たしている）ダビデに、罪を犯したこの息子を釈放してほしい、と嘆願したのです。

そして、実に興味深いことに、彼女はこう宣言しています。「責めは、わたしとわたしの父の家にございます。王様も王座も責めを負ってはなりません」（サム下 14:9）と。女もダビデも、もし王が殺人者を釈放したなら、王自身がその殺人者の責めを引き受けることになり、王の正義の王座（つまり、裁判官としての評価）は危うくなるであろうことを理解していました。裁判官は、自分が決定することに対して道徳的な責任を負っていました。それゆえ、自分がこの罪を引き受けますと、女は申し出たのです。

同様に、罪人たちが無罪であると宣告するために、神は彼らの罪を自ら引き受けられます。私たちが赦されるために、**神御自身が私たちの罰を背負われなければならない**のです。私たちが救われるとした場合、なぜキリストが死ななければならなかったのか、その法的根拠がこれなのです。

問1 レビ記4：27～31を読んでください。清めの献げ物を用いて、どのような儀礼行為がなされましたか。

この献げ物の目的は、罪人から罪を取り去り、その責任を聖所へ移し、罪人を赦し、清めることでした〔極めて例外的な事例ですが、清めの献げ物として一定量の良質な小麦粉を持ってくることもできました。この清めの献げ物は流血を伴わないものでしたが、「血を流すことなしには罪の赦しはありえない」（ヘブ9：22）ことを、だれもが知っていました〕。

その儀式には、両手を置くこと、動物を殺すこと、血を祭壇の四隅に塗ったりすること、脂肪を燃やすこと、動物の肉を食べることなどが含まれていました。献げ物を持ってきた罪人には赦しが与えられましたが、それは血の儀式が終わったあとのことでした。

この過程における不可欠な部分の一つが、両手を置くことでした（レビ1：4、4：4、16：21）。これは、献げ物が「その人の罪を贖う儀式を行うものとして受け入れられる」（レビ1：4）ためになされました。献げ物は、両手を動物の頭の上に置いた人だけに有効とされたのです。レビ記16：21によれば、両手を置くときには告白が伴い、これによって罪ある人から罪なき動物へ罪が移ったと認められました。

言うまでもなく、動物をささげるには屠（は）ることが不可欠でした。動物が殺されたあと、流れ出た血は祭壇の上で贖いをするために用いられました（レビ17：11）。手を置くことで罪はその動物に移っているため、動物の死は身代わりの死と理解すべきです。動物は罪人の代わりに死んだのです。動物を殺すという行為を、なぜ祭司ではなく、罪を犯した者がしなければならなかったのかは、このことが説明してくれるでしょう。

◆ この次、あなたが罪を犯すように誘惑されるとき、十字架で亡くなられたイエスを思い描き、彼の上に手を置き、罪を告白しているあなたの姿を見てください。あなたの心の中で展開されるこのような思いは、赦されるために必要となるものについて理解するうえで、いかに助けとなりますか。また、誘惑に屈しないために、いかに役立つでしょうか。

火曜日

罪を移すこと

10月29日

「ユダの罪は、鉄の筆、金剛石のとがりをもってしるされ、彼らの心の碑と、祭壇の角に彫りつけられている」（エレ17：1、口語訳）。

動物に手を置き、殺したあとに続く儀礼行為は、血を取り扱うことです。祭司はいけにえの血を祭壇の角に塗りつけました。血が用いられたので、儀式のこの部分は贖いと関係していたのです（レビ17：11）。もし罪を犯した者が一般の人か、指導者であれば、その血は焼き尽くす献げ物の祭壇に塗られ（同4：25、30）、もし大祭司が共同体全体であれば、その血は幕屋の内部の祭壇、つまり香をたく祭壇に塗られました（同4：7、18）。

祭壇の隅の角に血を塗りつけるというのは、何を意味していたのでしょうか。角は祭壇の最も上の部分にあり、救済というものの垂直的な特徴をあらわしていました。血はこうして神の前へ持ち込まれたのです。

エレミヤ17：1は、何が起こるのかを理解するうえで特に重要です。「ユダの罪は、……彼らの心の碑と、祭壇の角に彫りつけられている」とあります。この聖句は偶像礼拝に使われた祭壇について述べているのですが、原則は変わりません。祭壇は人々の道徳的状态を反映していた、ということです。血は罪を移しました。祭壇の角に塗られた血は、罪人から罪を取り去って聖所へ移しました。これは、地上の聖所の務めの中にあらわされている救済計画を理解するうえで、極めて重要な真理であるとともに、天においてキリストが私たちのためになさっておられる働きを象徴しているのです。

血が罪を運ぶので、血は聖所を汚しました。清めの献げ物の血がうっかりして服に飛び散るような場合が、その汚れの一例です。汚れた服は洗う必要がありますが、それは他のいかなる場所でもなく、「聖域において」（レビ6：20、口語訳6：27「聖なる所で」）洗うことになっていました。

最後に、祭壇で脂肪を燃やすことは、清めの献げ物に関するあらゆることは神に属していることをあらわしていました（レビ3：16）。

こういったいけにえによって象徴されるように、イエスが死なれたおかげで、私たちの罪は取り去られて彼に置かれ、天の聖所に移されたのです。救済計画の中心は、このことです。

◆ 聖所の務めは、罪の赦しに関して、私たちが神にまったく依存していることを理解するうえで、いかに助けとなりますか。同時に、どのような重大な責任が伴うでしょうか（Iペト1：22参照）。

問2 レビ記 6：18、19(口語訳 6：25、26)、10：16～18 を読んでください。
ここにはどのような重要な真理が明らかにされていますか。

献げ物を聖域で食べることによって、儀式を執行する祭司は、罪を犯した者の「罪を負う」ことになります。この献げ物の肉は、祭司の奉仕に対する報酬であるばかりでなく、贖罪の重要な部分だったのです(そうでなければ、モーセは、アロンの息子たちがそれを食べなかったことに対して、あれほど怒らなかったでしょう)。

献げ物を食べることは、贖罪の過程にどのような貢献をするのでしょうか。食べることが要求されたのは、聖所に血を持ち込まない献げ物、つまり一般の人や指導者の献げ物に関してでした。聖書は、献げ物を食べることで祭司が「罪を運び(取り)去り」、それによって罪人のための「贖いがなされる」とはっきり述べています。罪人の罪を運ぶことは、その罪人が今や釈放されていることを意味しているのです。

出エジプト記 34：7 は、原語のヘブライ語だと、神は「罪を運ぶ」と書かれており、この二つの言葉は、罪を運ぶ祭司の行為が罪人に赦しをもたらすことを明示しているレビ記 10：17 でも使われています。このように移すことがなければ、罪人は自分の罪を運ば(負わ)なければならず(レビ 5：1)、言うまでもなく、それは死をもたらすのです(ロマ 6：23)。

ほかの人の罪を負うという祭司の働きは、まさにキリストが私たちのためになされたことです。キリストは私たちの代わりに亡くなられました。彼が私たちの罪を引き受けられたがゆえに、地上の聖所における祭司の働きは、キリストの働きを予表していたと、私たちは結論づけることができます。

「祝福は赦しによってもたらされ、赦しは、偉大なる罪の背負い主が、告白され、悔い改められた罪を負われるという信仰によってもたらされる。このように、私たちのあらゆる祝福は、キリストを通して与えられる。彼の死は、私たちの罪を贖うための犠牲である。彼は、私たちが神の憐れみと好意を受けるための大いなる仲介者なのだ。そして、私たちの信仰の創始者であり、完成者でもあられる」(『原稿集』第9巻 302 ページ、英文)。

木曜日

赦 し

10月31日

問3 ミカ7：18～20を読んでください。これらの聖句は神をどのように描いていますか。

ミカ書の最後の三節は、神とその残りの民との関係に焦点を合わせており、なぜ神が比類なき方であるのかを、見事に説明しています。神がたぐいまれなる方であられるのは、その寛容な愛と恵みのゆえなのです。ミカ書などで明らかにされている神の際立った特性は、赦そうとする意欲です。ミカは神の御性質（18節）と功績（19、20節）をさまざまに表現することで、この点を強調しています。しかも、これらの御性質や功績は、出エジプト記34：6、7の「イスラエル人の信条」――神の御品性に関する聖書の記述で最も愛されている箇所――の言葉を用いて説明されているのです。

興味深いことに、ミカ7：18～20の中の重要な言葉のいくつかは、赦しの手段が人々のために苦しむ方によってもたらされることを指摘しているイザヤ書53章の「苦難の僕の歌」でも用いられています。

残念なことに、すべての人が神の救いの恵みを享受するわけではありません。神の赦しは安価なものでも、自動的なものでもないのです。それには忠誠心が伴います。神の恵みを体験した者は、ミカ書の中心的聖句（6：9）に見られるような対応をします。神は、御自分が「慈しみを喜ばれる」ように、「慈しみを愛し」なさい、と残りの民にお求めになるのです。神の民は神の御品性をまねようとします。彼らの生活は、神の愛、思いやり、慈しみを反映するのです。

聖書において、赦しを強調するミカ7：18～20のすぐあとには、裁きを強調するナホム1：2、3が続いています。このことは、私たちに対する神の対応の二つの側面を明らかにしています。つまり、悔い改める者を赦し、神に逆らう者を罰せられる、ということです。いずれの面も神に属するもので、神は救い主であるとともに裁き主でもあられます。神の御品性のこの両面は、相補うものであって、相対立するものではありません。憐れみ深い神は、公正な神でもあられるのです。このことを知るときに、私たちは神の愛、赦し、最終的な正義を確信できるのです。

『希望への光』175～182ページ（『人類のあけぼの』405～423ページ）。

「キリストが昇天に際して神の御前に現れ、悔い改めた罪人のためにご自分の血による嘆願をなさったように、祭司は日ごとの務めにおいて、罪人のために聖所でいけにえの血を注いだ。

キリストの血は、悔い改めた罪人を律法の宣告から解放したが、しかし、それは罪を消し去るものではなかった。罪は最終的な贖罪の時まで聖所の記録に残るのである。そのように象徴においても、罪祭の血は悔い改めた者から罪を取り除いたが、罪は贖罪の日まで聖所に残った」（『希望への光』182ページ、『人類のあけぼの』下巻422ページ）。

— 考えてみましょう —

- ◆ 裁きの場で、神の御前に立っているところを想像してみてください。あなたは何を頼りにしますか——善行、安息日の順守、あなたが行ったあらゆる良いこと、行わなかったあらゆる悪いことでしょうか。聖く、完全な神の御前で、こういったものがあなたを無罪にすると、心から思えますか。もしそう思えないなら、裁きにおけるあなたの唯一の希望は、何ですか。（水曜日参照）
- ◆ ミカ6：8を読んでください。こういった原則を欠いている信仰の証しは、その証しの真実味を示すのに役立つでしょうか。イエスに対する信仰を主張することと、この聖句で述べられているように、その信仰を生きたことと、どちらが簡単ですか。どうしたら、イエスに対する信仰をよりよく生きることができるのでしょうか。（木曜日参照）

話し合いのための質問

- ① クラスでミカ6：8を読んでください。どのようなことが私たちに語られていますか。さらに重要なことに、どのようにしたらこの明確な命令を実行することができますか。「へりくだって神と共に歩むこと」を含めて、私たちはどのようにしたらこれらのことをすべて行えるようになりますか。それは何を意味するのでしょうか。「へりくだって神と共に歩むこと」を、どのようにしたら、「へりくだって他者と共に歩むこと」に変えることができるのでしょうか。



贖罪日

●暗唱聖句●

「あなたのような神がほかにあろうか／咎を除き、罪を赦される神が。神は御自分の嗣業の民の残りの者に／いつまでも怒りを保たれることはない／神は慈しみを喜ばれるゆえに。主は再び我らを憐れみ／我らの咎を抑え／すべての罪を海の深みに投げ込まれる」

（ミカ 7：18、19、新共同訳）

「だれかあなたのように不義をゆるし、その嗣業の残れる者のためにとがを見過ごされる神があろうか。神はいつくしみを喜ばれるので、その怒りをながく保たず、再びわれわれをあわれみ、われわれの不義を足で踏みつけられる。あなたはわれわれのもろもろの罪を海の深みに投げ入れ（る）」（ミカ 7：18、19、口語訳）

今週の聖句

レビ記 16 章、レビ記 23：27～32、
マタイ 18：23～35、イザヤ 6：1～6

安息日午後

今週のテーマ

11月2日

レビ記 16 章で明らかなように、贖罪日（ヨム・キプール）は、旧約時代の儀式の中で最も厳粛なものです。この日に関する記述は、モーセ五書の中心にあるレビ記の、さらにその真ん中に、意図的に配置されています。この儀式の「神聖さ」を説明するためです。また、この日は「最も厳かな安息日」（レビ 16：31）とも呼ばれ、イスラエルの年ごとの祭りとしては珍しく、人々はあらゆる仕事をしないように求められました。この事実、贖罪日を安息日——神が創造主・贖い主として成し遂げられたことを思い、憩う時——の概念にふさわしいものとしています。

私たちは今週の研究において、贖罪日に地上の聖所でどのようなことが行われたのか、とりわけ、救済と罪の最終的な処分をより深く理解するのに役立つ、2 匹の山羊を用いた儀式について学びます。

レビ記 16:16、30 を読んでください。1 年を通じて、あらゆる罪と儀礼的汚れは聖所に移され、贖罪日が来ると、それらは取り除かれました。贖罪日は、おもに三つの部分から成っています。

① **祭司のための清めの献げ物**——大祭司が自分の罪のために雄牛^{ほふ}を屠り、聖所に入って、そこを清める儀式を行うとき、自分自身が汚れていないようにしました。

② **「主のため」**(レビ 16:8、口語訳) **の山羊の清めの献げ物**——1 年を通じて、清めの献げ物はイスラエルの人々のあらゆる罪を聖所へ「運び」ました。贖罪日は、これらの罪を聖所から取り除く時であり、その処理の過程は「主のため」の山羊の血によってなされました。

③ **アザゼルのための生きている山羊を用いた除去の儀式**——神は、御自分の民の罪を聖所や宿営から遠ざけたいと願われました。それゆえ、もう1匹の生きている山羊が、荒れ野へ追いやられました。

問1 レビ記 16:15 を読んでください。この山羊はどうなりましたか。それはどのようなことを象徴していましたか。

主のための山羊に関しては、罪の告白も、手を置くこともなかったので、その血は罪を運ぶものではありませんでした。それは汚すのではなく、むしろ清めたのです。その効果については、レビ記 16:16、20 にはっきり記されています。大祭司は主のための山羊^{あがな}の血で贖いをし、聖所全体を清めました。同じ手続きが民を清める効果もあったため、聖所が民のあらゆる罪から清められたとき、民自身も清められたのです。この意味において、贖罪日は特別でした。聖所と民の両方が清められるのは、この日に限ってのことだったからです。

贖罪日は、二段階から成る贖罪の二番目の段階でした。第一段階において、イスラエルの人々は1 年を通じて赦されました。彼らの罪は消去されたわけではなく、罪の処理を約束なさった神御自身にゆだねられたのです。第二段階は、赦しとはあまり関係がありませんでした。人々がすでに赦されていたからです。実際、レビ記の16 章や23:27～32 の中に、「赦す」という動詞はまったく出てきません。このことは、救済計画というものが単に私たちの罪の赦しを扱うものではないことを示しており、それは、大争闘というより広い背景の中で理解されるときに納得がいく点なのです。

月曜日

赦しを超えた清め

11月4日

問2 レビ記 16：32～34 を読んでください。大祭司が贖罪日に行った主要な任務は何でしたか。

大祭司の主要な機能は、神と人間とを執り成すことでした。聖所に関して、彼はその制度を運営し、「供え物といけにえ」（ヘブ 8：3）のさまざまな儀式を行いました。贖罪日の彼の任務は重大でした。アザゼルのための山羊を荒れ野に引いて行くことを除けば、（その山羊を追いやるように命じることも含めて）彼はほとんどすべての儀式を行ったのです。

贖罪日の当日、「偉大な」大祭司は呼び名のとおり、キリストをあらわす生ける手本となりました。神の民の注意が大祭司に向けられたように、イエスは私たちの注意を向けるべき唯一の中心です。地上での大祭司の働きが民に清めをもたらしたように、天の聖所におけるイエスの働きは、私たちに清めをもたらします（ロマ 8：34、Iヨハ 1：9）。贖罪日に、民にとっての頼みの綱が大祭司であったように、私たちににとっての唯一の頼みの綱は、キリストなのです。

「キリストの血は、悔い改めた罪人を律法の宣告から解放したが、しかし、それは罪を消し去るものではなかった。罪は最終的な贖罪の時まで聖所の記録に残るのである。そのような象徴においても、罪祭の血は悔い改めた者から罪を取り除いたが、罪は贖罪の日まで聖所に残った」（『希望への光』182 ページ、『人類のあけぼの』上巻 422 ページ）。

レビ記 16：16～20 によれば、大祭司は至聖所に入って、儀礼的汚れ、背き、罪から、その場所を清めなければなりませんでした。その後、彼はイスラエルのあらゆる罪責、背き、罪を、生きている山羊に移し、それらを山羊によって荒れ野へ追いやるのです。こうして、イスラエルのあらゆる道徳的過ちはなくなり、贖罪日の特殊な目的——赦しを超えた道徳的清め——がなし遂げられました。この日、新たな赦しは必要とされませんでした。神が彼らの罪をすでにお赦しになったからです。

◆ 私たちが、すべての罪を捨てるために神から与えられたあらゆる力を用いて戦うとき、どのようにしたら、救いの唯一の頼みの綱としてキリストの功績に頼りきることができるでしょうか。

問3 レビ記 16：20～22 を読んでください。生きている山羊はどうになりましたか。

生きている山羊を用いた儀式は、献げ物ではありませんでした。2匹の山羊のいずれがヤーウエのもので、いずれがアザゼルのものであるかをくじで決めたあと、ヤーウエのための山羊だけが清め（贖罪）の献げ物（レビ 16：9、15）と呼ばれています。それに反して、アザゼルのための山羊は「生きている山羊」と呼ばれており、決して屠られませんでした。たぶん、この雄山羊が犠牲とみなされないようにするためでしょう。生きている羊がその役割を果たすのは、大祭司が聖所全体の贖罪を終えたあとのことでした。この点はいくら強調しても、しすぎることはありません。**あとから行われた、生きている山羊を用いての儀式は、聖所や人々の実際的な清めとは無関係でした。**聖所も人々も、すでに清められていたからです。

アザゼルとは何のこと、あるいはだれのことでしょうか。昔のユダヤ人解説者たちはアザゼルを、最初に罪を犯した天使、悪の張本人であるとともに、悪天使たちのリーダーである者とみなしました。言うまでもなく、私たちはそれがガルシファーの象徴であることを知っています。

生きている山羊を用いる儀式は、罪の最終的な処分を成し遂げる除去の儀式でした。まず罪が、その原因となった者に負わされ、次に人々の間から永遠に運び去られるのです。山羊が罪に対する最終的責任を負ったときに、懲罰的な意味で「贖罪」はなされました（レビ 16：10）。

では、サタンは私たちの救済に貢献しているのでしょうか。私たちがそのような教えていると、ある人たちが不当に非難するように……。もちろん、そんなことはありません。サタンは私たちの代わりに、罪を担ったりなど決してしません。イエスだけがそうなるのであり、サタンが私たちの贖罪の一翼を担っているなどと考えるのは、神への冒瀆（ぼうとく）です。

生きている山羊を用いる儀式と、悪意のある証言者に関する律法（申 19：16～21）との間には、類似点があります。原告も被告も、祭司や裁判官としてあらわされている主の前に立ち、取り調べがなされ、もし原告が悪意のある証言者であるとわかったなら、彼は無実の被告に求めた罰を自身に受けることになるのです（例えば、忠実なモルデカイを絞首刑にしようと企んだ意地悪なハマンのように）。

水曜日

贖罪日

11月6日

「こうして、幕屋の務めと、のちにこれにとって代わった神殿の務めから、民はキリストの死とその務めに関する真理を日ごとに学び、そして、毎年一度、彼らの心はキリストとサタンとの間の大争闘の終結、宇宙が罪と罪人から清められる最終的な清めに向けられたのであった」(『希望への光』182 ページ、『人類のあけぼの』上巻 423 ページ)。

問4 レビ記 16 : 29 ~ 31、23 : 27 ~ 32 を読んでください。神は、イスラエルの人々が年に一度の贖罪日 (ヨム・キプール) にどうすることを願われましたか。これらの原則は、「実体 (対型) としての贖罪日」と呼ばれる時代に生きる、今日の私たちにいかに適用されますか。

もし古代イスラエルの中で、だれかがこれらの命令に従わなかったなら、彼は絶たれ、滅ばされなければなりませんでした (ルビ 23 : 29、30)。贖罪日は、まさに生きるか死ぬかの日だったのです。信者には完全な忠誠が求められました。

その年の途中に、贖罪の第一段階——つまり、日ごとの献げ物——で自分の罪を認めたものの、贖罪日を真剣に受け止めなかった人がいたと想像してみてください。その人は、神がこの日に実行するように計画なさったことを軽視し、それによって神に不忠実であることを証明したのです。

このことの意味は、神に対する信仰を告白している人でも、救いを失うことはありえるということです。私たちセブンスデー・アドベンチストは、一度救われたなら常に救われるという教えを信じません。聖書がそのように教えていないからです。私たちがキリストにあって安全なのは、誘惑されたときにはキリストの力を自分のものとして求め、過ちを犯したときには赦しを求め、そのようにしながら信仰に生き、キリストに服従し続ける限りのことなのです。

◆ マタイ 18 : 23 ~ 35 を読んでください。この力強いたとえ話から、私たちはどのような教訓を学び取るべきですか。

イザヤ6:1～6において、預言者イザヤは、「高く天にある御座に主が座しておられるのを見」ています。その幻は裁きの場面であり、裁きのためにおいでになる方として神を描いているのです（イザ5:16）。イザヤは真の王を見ており、その方はヨハネによる福音書の中でイエス・キリストとみなされています（ヨハ12:41）。

イザヤは神の預言者であり、人々に悔い改めを求めましたが、神の御前では彼自身が絶望的であることを理解しました。神の聖さと栄光を眼前に突きつけられて、イザヤは自分の罪深さと同胞の汚れとを自覚したのです。聖さと罪は、相いれません。イザヤと同様に、私たちはみな、自分の力で神の裁きを通過することはできないという結論に達する必要があります。私たちの唯一の希望は、身代わりになってくださる方を受け入れることなのです。

イザヤ6:1～6には、贖罪日との類似点があります。煙に満たされた神殿、祭壇、裁き、罪や汚れのための贖いなどの組み合わせは、贖罪日を強く思い起こさせます。イザヤは彼自身の、いわば「個人的な贖罪日」を体験したのです。

祭司のような機能を果たすセラフィム〔文字どおりの意味は「燃えている者（天使）」〕が、ある種の献げ物と思われる炭火を祭壇から取り、預言者の罪を除こうとします。これは、イエスの犠牲と彼の執り成しの祭司職を通して可能な罪からの清めを適切に表現するものです。イザヤはこれを清めの儀式と認識し、炭火が唇に触れる際にじっとしていました。その結果、彼の「咎は取り去られ、罪は赦された」（イザ6:7）のです。この聖句の動詞が受動態であることは、赦しが御座に座しておられる方によって認められたことを示しています。裁き主は救い主でもあるのです。

神の清めの働きは、「災いだ」から「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」へと、私たちを変えます。真の理解は確信と自信につながるので、贖罪日の天の聖所の働きを理解することが、宣教への心の備えをもたらすのです。私たちは次のことを知っています。裁きにおいて、私たちには身代わりであるイエス・キリストがおられ、（血によって象徴される）彼の義だけが、有罪判決を心配せずに私たちを立たせるのだということを（ロマ8:1）……。感謝の気持ちは宣教を動機づけます。無罪判決を言い渡された罪人は、神の最高の使者です（II コリ5:18～20）。なぜなら、彼らは、自分が神によって何から解放されたのかを知っているからです。

金曜日

さらなる研究

11月8日

「ここで、贖罪の日の最後の厳粛な務めに予表されていた事件が起こる。至聖所における務めが完了して、イスラエルの罪が、罪祭の血によって聖所から除かれた時に、アザゼルの山羊が生きたまま主の前に連れて来られた。そして、大祭司は、会衆の前で、『イスラエルの人々のもろもろの悪と、もろもろのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪の上に告白し』た（レビ16：21）。それと同様に、天の聖所における贖罪の働きが完了した時に、神と天使たちと贖われた人々の群れとの前で、神の民の罪が、サタンの上におかれるのである。彼が神の民に犯させたすべての罪惡の責任が、彼にあることが宣言される」（『希望への光』1920 ページ、『各時代の斗争闘』下巻 441 ページ）。

考えてみましょう

- ◆ 神の憐れみ深い赦しと、神が私たちの罪をもはや覚えておられない事実を（エレ31：34）、改めて感謝してください。ひとたび罪が赦されたなら、どのようにしてその罪を忘れることができるでしょうか。そうすることは、なぜ大切なのですか。（火曜日参照）

話し合いのための質問

- ① 救済計画に対するいかなる理解も、もし大祭司としてのキリストの働きを除外したり、過小評価したりしているなら、なぜ不完全なのですか。聖所における執り成しの働きが、いかに救済計画の中心であるかということについて、聖所は私たちに何を教えてくれますか。新約聖書の一書巻であるヘブライ人への手紙は、その大半が天の聖所におけるキリストの働きを扱っています。この事実を考慮するとき、キリストのこの働きはどれほど重要なのでしょうか。
- ② 多くのセブンスデー・アドベンチストは、救いの確信を与えられないような仕方、贖罪日について教えられてきました。そのような見解は、贖罪日の目的の誤解から生じたものです。「贖罪」という名前について、考えてみてください。それは何を意味するのでしょうか。贖罪はどのようにして成し遂げられるのでしょうか。この働きをなさるのは、どなたですか。これらの問いに対する答えは、なぜ贖罪日が福音であるかを理解するうえで、いかに助けとなりますか。



キリスト——私たちの犠牲

●暗唱聖句●

「そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました」
(Iペトロ2:24、新共同訳)

「さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである」(Iペテロ2:24、口語訳)

今週の聖句

イザヤ53:2～12、ヘブライ2:9、ヘブライ9:26～28、
ヘブライ9:12、出エジプト記12:5、ヘブライ4:15

安息日午後

今週のテーマ

11月9日

カトリックのマクシミリアノ・コルベ神父は、2000人のユダヤ人を含むポーランドからの避難民をかくまったという理由で、アウシュビッツの強制収容所に入れました。あるとき、彼の収容施設から囚人が1人姿を消し（恐らくは、脱走し）、ヒトラーの親衛隊は報復として餓死させるために10人の囚人を選んだのです。すると、選ばれた男たちの中の1人が泣き叫びました。「あー、妻や子どもがかわいそうだ。もう二度と私に会えないなんて!」と。そのとき、コルベ神父が身代わりを申し出ました。取り乱した家族思いの男の代わりに、自分を餓死させる1人にしてほしい、と頼み込んだのです。驚きつつも親衛隊長は同意したため、先の男は（少なくとも当分の間）生き延びることになり、コルベ神父は死を運命づけられた者たちに加わりました。

しかし、心を打つコルベ神父の犠牲も、自ら進んで私たちの身代わりになられた方——聖所の務めに象徴される行為——の影にすぎません。新約聖書は、旧約聖書の犠牲制度の二つの重要な側面とイエスを同一視しています。すなわち、イエスは私たちの犠牲であるとともに（ヘブ9章、10章）、私たちの大祭司である（5章～10章）と見ているのです。

私たちは今週の研究において、キリストの究極の犠牲のさまざまな側面と、一度きりの彼の死が私たちにもたらしたものについて学びます。

日曜日

イザヤ53章の中のイエス

11月10日

イザヤ 52:13～53:12 は、この世の罪のために命を捨てられたキリストの死に関する力強い記述です。これらの聖句は、イエスの死が身代わりの受刑という形での贖罪である——イエスが、ほかの人々の受けるべき罰を引き受けたばかりか、彼らの身代わりとして亡くなられた——ことの明確な証拠を提供しています。私たちのためのイエスの働きについて、この箇所は次のような意味を含んでいます。

①イエスは他者のために苦しめました。彼は、彼らの病や痛み（4 節）、背きや咎（5、6、8 節）や過ち（12 節）を担われたのです。

②イエスは、自分が身代わりとなって苦しんだ人たちに、平和と癒し（5 節）、義認（11 節）など、大きな益をもたらされます。

③イエスが苦しみ、打ち碎かれること（10 節）は、神の御心でした。神は私たちの罪（6 節）を彼に負わせられました。イエスが私たちの代わりに死ぬことが、神の御計画だったからです。

④イエスは不法とも偽りとも（9 節）無縁の、正しい方（11 節）でした。

⑤イエスは償いの献げ物（10 節）、罪を贖う献げ物でした。

問1 ルカ 22:37、使徒言行録 8:32～35、I ペトロ 2:21～25 を読んでください。これらの新約聖書の記者は、イザヤ 53 章をどのように解釈していますか。

イザヤ 53 章に対する新約聖書のさりげない言及は、疑う余地なく、イエス・キリストがこの預言を成就されたことを立証しています。イエス御自身が、そこに描かれている人と御自分を同一視なさっておられるのです（ルカ 22:37）。私たちが赦され、変えられるように、キリストは私たちの罪を御自分に引き受けられたのでした。

◆ イザヤ 53 章を読み、キリストが私たちのためになさったあらゆることについて、じっくり考えてみてください。あなたがこれまでに何をしてこようと、あなたが信仰によって自分を主にささげ、主に服従するなら、ここでの確証はあなたに適用されます。どのようにすれば、これを自分のものにすることができるでしょうか。

問2 ヘブライ2:9を読んでください。イエスが「すべての人のために死んでくださった」とは、どのようなことを意味するのでしょうか（ヘブ2:17、9:26～28、10:12も参照）。

イエスは罪人のために死なれました。彼は罪を犯しませんでしたから（ヘブ4:15）、彼がいけにえとして命をささげられたとき、御自分の罪のために死なれたものではありません。それどころか、イエスは「民の罪を償（い）」（ヘブ2:17）、「罪を取り去るため」に（ヘブ9:26）、「多くの人の罪を負」（ヘブ9:28）わねばなりませんでした。

ヘブライ2:9によれば、イエスが「天使たちよりも……低い者とされた」のは、死を体験するためでした。重要なのは、なぜイエスの死が、称賛を受けるために不可欠な条件だったのかを説明することです。簡単に言えば、人間が救われるために、イエスが死なれる以外に道はなかったのです。

この聖句において、受肉の目的は子なる神の死です。死を体験することによってのみ、イエスは救いの創始者になることがおできになりました（ヘブ2:10）。

イエスを苦しめることは、神にとってなぜふさわしかったのでしょうか。ヘブライ2:14～18は、イエスの死が死の奴隷状態から、悪魔から、死の恐怖から神の子らを救い出し、イエスに「憐れみ深い、忠実な大祭司」となる資格を与えるために必要であったことを示唆しています。要するに、十字架が王冠に先行しなければならなかったのです。

「われわれの身代りまた保証人としてキリストの上にわれわれ全部の者の不義がおかれた。律法による有罪の宣告からわれわれをあがなわんがために、キリストは、罪人にかぞえられた。アダムの子孫一人一人の不義がキリストの心に重くのしかかった。罪に対する神の怒り、不義に対する神の不興の恐るべきあらわれが、み子の魂を非常な驚きと恐れで満たした」（『希望への光』1075ページ、『各時代の希望』下巻274、275ページ）。

◆ 宇宙の創造者であられるキリストが、あなたの罪のために人間として死なれたのです。このことの意味について、じっくり考えてみてください。それが信じがたいほどの福音であること、それがあなた個人にもたらす希望について、考えてみましょう。どのようにしたらこの驚くべき真理を、あなたのあらゆる行動の根本的な動機にできるでしょうか。

火曜日

キリストの血

11月12日

贖いの血という考え方は、聖書全体に行き渡っています。アダムとエバが罪を犯したあとの最初の犠牲に始まり、動物のいけにえがささげられるとき、血は常に存在しました。血の儀式がイスラエルの犠牲制度を特徴づけていたのは、血がなければ、私たちが罪を赦されることも、神の御前に行くこともできないという重要な真理を説明するためでした。血は、神の憐れみを受け、神と交わるための唯一の方法だったのです。

問3 キリストの血と旧約聖書の犠牲の血に関する次の聖句を読んでください。これらの聖句は血について、どのようなことを教えてください。

ヘブライ 9：12 _____
 ヘブライ 9：14 _____
 ヘブライ 9：18 _____
 ヘブライ 9：22 _____
 ヘブライ 10：19 _____
 ヘブライ 12：24 _____
 ヘブライ 13：12 _____
 ヘブライ 13：20 _____

「キリストの血」という言葉は、彼の命を指しているのではなく、彼の身代わりの死の象徴であり、そのような死の機能的側面を説明しているのです。キリストが流された血には、驚くほど多くの機能があります。キリストの血は永遠の贖いを成し遂げ、罪からの清めを与え、赦し、聖別し、さらには復活の根拠です。

ヘブライ語では、ここに強い対比があります。すなわち、キリストの血は、他のいかなる血よりも優れている、という対比です。実際、他のいかなる血も赦しを与えることはできません。キリストの血だけが、十字架以前も、十字架以後も、罪が赦される唯一の根拠なのです（ヘブ 9：15）。キリストの血を流すこととその効果とは、キリストの死が身代わりの死であること——私たちの受けるべき罰を彼が受けられたこと——の明白な証拠です。

◆ キリストの死に対する理解は、行いによって人は救われうるという考えから、いかに私たちを解き放ってくれるのでしょうか。

いけにえの動物を選ぶ際には、細心の注意が必要でした。献げ物の動物はどれでもよい、というものではなかったのです。その動物は、献げ物の種類に従って、いくつかの基準を満たす必要がありました。

しかし、あらゆる献げ物が満たさなければならない基準が一つありました。「無傷の」ものでなければならない、という基準です（出12:5、レビ3:1、4:3）。これに相当するヘブライ語（ターミム）は、「全き」「傷（痛手）を受けていない」「とがめのない」「完全な」とも訳されます。この言葉は、何かが最高の基準に合致しているという概念をあらわしているのです。最高のものだけが良しとされたのでした。人間との関連では、神との関係が「全き」状態にあることを表現するために、この言葉は用いられています（創6:9、17:1）。

問4 次の聖句はイエスをどのように描いていますか（ヘブ4:15、7:26、9:14、Iペト1:18、19）。イエスに罪がないことは、なぜ重要なのですか。

「世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハ1:29）であられたイエスは、傷なきいけにえという旧約聖書の基準を完全に満たしておられます。その汚れなき生活が、イエスを完璧ないけにえとしたのであり、これが私たちの救いの保証なのです。なぜなら、罪なき者だけが私たちのために罪を背負うことができ、さらに、私たちを覆うことができるのは、今も、裁きのときも、彼の完璧な義だからです。その義が、私たちの救いの希望なのです。

「無傷の」に相当するギリシア語（アモーモス）は、それに対応するヘブライ語と同様、イエスとその傷のないいけにえを説明するだけでなく、彼の弟子たちの品性を説明するためにも用いられています。

「キリストの御品性と自分の生活を比較することによって、彼らはどこで神の聖なる律法の要求に応じなかったのかに気づき、神が神の領域において完全であられるように、自分の領域において自分自身を完全にしようと努めるでしょう」（エレン・G・ホワイト『ポールソン氏所蔵のエレン・G・ホワイトの手紙』374ページ、英文）。

キリストの死とキリストの働きによって、私たちは非の打ちどころのないものとして神の御前に立たせていただきます（ユダ24）。これは、私たちの代わりに立ってくださる非の打ちどころのない方のゆえに可能なことなのです。

木曜日

大きな危険

11月14日

パウロはヘブライ人への手紙の中で、キリストの犠牲に対する神学的理解に目を向けるだけでなく、その実際的な意義についても説明しています。彼は、もしこの犠牲を無視するならどのようなことになるのか、いくつかの箇所でも明らかにしているのです（ヘブ 6：4～6、10：26～31）。

パウロはこの書簡の中で、神の救いがいかにすばらしいものであるか、神がいかに御自身を啓示なさっておられるか、神が信者のためにこれまで何をなさり、現在何をしておられるかについて、はっきり示しています。しかし、彼が取り組まなければならない厄介な問題が、少なくとも一つありました。それは、キリストの犠牲が当たり前のように次第にみなされていってしまうという危険性です。パウロはその危険性を、目標から「押し流され（ること）」（ヘブ 2：1）と表現しています。この言葉の裏で彼がイメージしているのは、航路をそれて、目指す港に着くことのない船でしょう。最も大切な任務は、進路から外れないことなのです。

神を退ける者たちの中には、意図的にそうする人がいます。つまり、福音を受けたあとも、彼らの生活が福音を受ける前と実質的に変わっていないという意味です。実のところ、そのような人たちには、自分の罪に対する有効ないけにえがありません（ヘブ 10：26～31）。しかし、あけすけにキリストの犠牲を退けたり、そのようなことを考えたりする信者は、多くないようです。それにもかかわらず、パウロは警告を発しています。軽視や無視の真の危険は、それが多くの場合、かすかに、しかも極めて緩やかに進行する点なのです。その推移は、気づかれなことがありません。エサウが長子の権利を感謝しなくなったように、キリストの働きが徐々に感謝されなくなっていくのです。キリストの犠牲に慣れすぎて、私たちがそれを当たり前とみなすようになってはいけません。

パウロは読み手を恐れさせたいとは思ってはいませんが、それにもかかわらず、神からそれてしまった結果を彼らに示しています。彼は、そのようなことが起きるのを望んでいません。肯定的な面として、彼は読者に、救いのあらゆる良いものを「しっかりと持ち続け」（ヘブ 3：6、14、10：23）、イエスを見つめるように（ヘブ 12：2）と強く勧めています。

◆ あなたは、十字架に関する驚くべき真理に慣れてしまっていないですか。そうなることは、なぜとんでもないことなのですか。私たちはどうしたら、パウロがここで警告している危険から自分を守ることができるのでしょうか。

マルチン・ルターが、人間の罪とキリストの義の「すばらしい交換」とか「喜ばしい交換」とたびたび呼んだ事柄について、エレン・G・ホワイトは次のような有名な言葉を残しています。

「当然キリストが受けられるべきとり扱いをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれが当然受けるべきとり扱いを受けられた。われわれのものではなかったキリストの義によってわれわれが義とされるように、キリストはご自分のものではなかったわれわれの罪の宣告を受けられた。キリストのものであるいのちをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれのものである死を受けられた。『その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ』（イザヤ 53:5)」（『希望への光』678 ページ、『各時代の希望』上巻 11 ページ）。

「キリストの死より以下のものでは、主の愛をわれわれのために効力のあるものとすることができない。われわれが主の再臨を喜びをもって期待できるのは、キリストが死んでくださったからにほかならない。キリストの犠牲はわれわれの望みの中心である。この上に、われわれの信仰をすえなければならない」（『希望への光』1022 ページ、『各時代の希望』下巻 140 ページ）。

— 考えてみましょう —

- ◆ 「聖く、非の打ちどころがない」状態にあるという考えは、なぜ不安を引き起こすことがあるのですか。キリストが私たちの身代わりであられるという知識は、あなたも「聖い」ということを受け入れるために、いかに助けとなりますか。神の御前における私たちの新しい立場は、私たちの生き方にどのような影響を与えるべきでしょうか。（水曜日参照）

話し合いのための質問

- ① 行いと救いの関係という問題について、悩んでいる人たちがいます。私たちが行いによる救いというわなに陥らないために、キリストの身代わりの死や、彼がその死によって成し遂げられたことを常に覚えておくことは、いかに助けとなりますか。突き詰めると、私たちの行いは、私たちの代わりに死ぬことでキリストがなさったことに、いったい何を付け加えることができるのでしょうか。



キリスト——私たちの祭司

●暗唱聖句●

「今述べていることの要点は、わたしたちにはこのような大祭司が与えられていて、天におられる大いなる方の玉座の右の座に着き、人間ではなく主がお建てになった聖所また真の幕屋で、仕えておられるということです」（ヘブライ 8：1、2、新共同訳）

「以上述べたことの要点は、このような大祭司がわたしたちのためにおられ、天にあって大能者の御座の右に座し、人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである」（ヘブル 8：1、2、口語訳）

今週の聖句

詩編 110：1～5、ローマ 8：31～34、
I テモテ 2：4～6、ヘブライ 8：6、ヘブライ 2：17、18、
ヘブライ 3：6、ヘブライ 10：1～14

安息日午後

今週のテーマ

11月16日

キリストは復活し、天の聖所へ昇られたあと、贖罪計画の新たな段階へお入りになりました（ヘブ 2：17）。御自身の犠牲という絶対条件が満たされたことで、キリストは大祭司に就き、信仰によりキリストの血によって贖われた者たちに、御自分の完璧な犠牲による仲保をするために祭司の務めを始められたのです。キリストの祭司職は二つの部分——日ごとの務めと年ごとの贖罪日の務め——から成っており、いずれも地上の聖所において予表されていました。

私たちは今週の研究において、日ごとの務めにおけるイエスの働きについて学ぶとともに、その働きが私たちに及ぼす影響について考えます。現在、イエスが神の御前に立って、私たちのために御自分の犠牲という功績を提供してくださっていることを知ることで、私たちは慰めを得ることができるでしょう。聖所のメッセージは、イエスに従う者たちの中の最も弱者たちにも、希望と励ましを与えるのです。

新約聖書の書卷の中で、祭司としてのイエスについて最も言及しているのはヘブライ人への手紙で、この書の背骨となっているのは、旧約聖書の詩編 110 編からの二つの引用聖句です。詩編 110:1 は、キリストは神の右の座に着かれたがゆえに何よりも高く上げられている、ということを確認するために引用されています。これはヘブライ人への手紙に繰り返し登場する主題で（ヘブ 1:3、4:14、7:26、8:1、12:2）、イエスの神性とメシア性を強調しています。また、詩編 110:4 は、キリストの祭司職がメルキゼデクによって予表されていたこと（ヘブ 5:6）を明示するために引用されています。

聖書にはメルキゼデクに関する情報があまり含まれていません。しかし、聖書が明らかにしている内容は、驚くほどイエスと類似しています。メルキゼデクはサレムという町の王です（サレムは「平和」を意味するので、彼は「平和の王」とも呼ばれています）。彼の名前は「義の王」という意味で、それは彼の品性を物語っています。家系が記されていないように、彼は歴史から切り離されていて、生没についても語られていないため、まるで彼には始めも終わりもないかのようです。また彼は「いと高き神の祭司」です。メルキゼデクの祭司職は、アブラハムを通してレビ人が什一を彼に納めたので、レビ人の祭司職よりも上位なのです。つまり、メルキゼデクはキリストの予型だということです。

しかし、キリストはそれ以上の大祭司です。アロンはイスラエルにおける最初の祭司でした。ヘブライ 5:1～4 は、アロンの大祭司職——神から任命されること、人間を代表すること、神の御前で執り成すこと、思いやること、人々と自分自身のためにいけにえをささげること——について記しています。

ヘブライ人への手紙は、キリストを新しい大祭司として描いています。彼はアロンよりも位が高く、アロンの子孫の祭司職の要求に応えるだけでなく、それを高めるのです。イエスは罪を犯さず、心から従順であり、御自分のために献げ物をささげる必要がありませんでした。それどころか、彼御自身が献げ物——ありえる最も完璧な献げ物——であられたのです。

それゆえにイエスは、アロンの子孫の大祭司職とメルキゼデクの大祭司職の両方を、これらの祭司や祭司職が果たした以上に、あるいは果たしえた以上に優れた方法で成し遂げられました。二つの予型は、キリストにあってその対型と出会ったのです。

月曜日

弁護者にして仲裁者

11月18日

ローマ8:31～34を読んでください。この聖句は、法廷の場面が背景となっており、私たちはそこで審理されている自分自身を思い浮かべる必要があります。

では、私たちと争っている相手はだれでしょうか。だれが私たちを訴えようとしているのでしょうか。だれが有罪判決を下すのでしょうか。そのような状況は私たちの背筋をゾッとさせます。結局のところ、私たちは人間の不完全さ、罪深さを、十分にわかっていないのではないのでしょうか。

しかし、恐れる必要はありません。何物も、だれも、私たちを神の愛から引き離すことはできないという約束は、次のようないくつかの重要な点に基づいています——神が私たちの味方であること（31節）、神が私たちのために御子を死に渡されたこと（32節）、神がすべてのものを無償で私たちにお与えになること（32節）、神が私たちを義とされること（33節）。イエス・キリストが私たちの側に付いておられます。イエスはあらゆる有罪宣告に対する答えです。なぜなら、彼は死に、復活し、現在は、神の右にあって私たちのために絶えず執り成しておられるからです（34節）。

もしだれかが私たちのために死ぬことさえいとわないとしたら、私たちはその人の愛を確信するはずです。ローマ8:31～39にあらわれている確信は、私たちが信じる神をよくあらわしています。私たちの神は、私たちに対する約束を何物によっても妨げさせないほど私たちを愛しておられます（35～39節）。もし私たちがこのことを理解するなら、神の法廷は喜びと祝いの場になるのです。

この真理は、Iヨハネ2:1、2において一層はっきりしています。ギリシア語の「パラクレートス」という言葉は、法的な助け手や弁護者、あるいは「仲裁者」としてだれかの代理で出廷する人を意味します。イエスは私たちの弁護者であり、私たちのために弁護なさいます。さもなければ、私たちには望みがないからです。

私たちの弁護者は「正しい方」で、父なる神がキリストの執り成しを聞き入れてくださるという確証を私たちに与えられます。なぜならキリストは、義なる父なる神が拒絶されるようなことをなさらなかったからです。キリストは罪を犯した者たちのために、彼らの代理で立つ正しい者——罪を犯さなかった者——として出廷し、執り成しをなさいます。

◆ 何物もあなたを神の愛から引き離すことはないというすばらしい約束をもっと体験するには、どうしたらよいですか。

問1 「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。この方はすべての人の贖いとして御自身を献げられました。これは定められた時になされた証しです」(Iテモ2:4～6)。キリストが私たちのために天で行っておられることを理解するうえで、この聖句はいかに助けとなりますか。

キリストは、唯一の「神と人との間の仲介者」と呼ばれています。ほかに仲介者がいないのは、キリスト以外に必要なからです。仲介者としてのキリストの立場を通して、救いと真理の知識はだれでも手に入れることができます(Iテモ2:4)。私たちにとって重要な問題は、キリストが私たち1人ひとりに、地位や人種、品性や過去の行いとは関係なく与えておられるものを利用するか否かなのです。

「仲介者」というのは、古代ギリシアの商業界や法曹界の言葉です。それは、意見の不一致を取り除いたり、契約や誓いを結ぶという共通の目標を実現したりするために、二者の間に入って仲裁者として交渉し、行動する人を意味します。

ヘブライ人への手紙の中で、仲介者のキリストは新しい契約と結びつけられています(ヘブ8:6、9:15、12:24)。キリストは和解を成し遂げられました。罪は神と人間との間の密接な交わりを破壊し、人類を破滅へ導くはずでしたが、キリストがおおいでになってそのつながりを修復されたのです。これが和解です。彼だけが神と人間との間の通路であり、この通路を通して、私たちは神との契約関係を十分に享受できるのです。

パウロはキリストのことを「人であるキリスト・イエス」(Iテモ2:5)と呼んでいます。それは、人でもあり、神でもあられるという主の比類なき御性質を表現しています。救いと執り成しは、まさにイエスの人間性と彼の自発的な自己放棄を根拠としており、イエスは人でもあり、神でもあられるがゆえに、決して断ち切られることのない結びつきで天と地をつなぐことがおできになるのです。

「イエス・キリストは、有限な人間と無限な神とをつなぎ、罪と背きによって天と離婚した地球を結びつけるために来られたのである」(エレン・G・ホワイト『説教と談話』第1巻253ページ、英文)。

水曜日

偉大なる大祭司

11月20日

イエスは「偉大な大祭司」（ヘブ 4:14）であり、あらゆる大祭司、あらゆる地上の支配者よりも優れた方です。聖書は、大祭司としてのイエスに多くの特性を認めています。

① **憐れみ深く、忠実であられる**——憐れみと忠実という二つの特徴は、仲保者としてのキリストの役割にふさわしいものです。なぜなら、ご自分の賜物を私たちに与え、父なる神と私たちに対して忠実であられるからです。

② **私たちとともにおられる**——イエスは私たちに共感できる方です（ヘブ 2:18、5:2、7）。イエスが人間として生きられたがゆえに、思いやりのある、申し分のない助け主であると、私たちは信じることができます。しかし、彼は私たちと同じ状況にあるではありません。彼は罪のないお方であるからです（ヘブ 4:15）。

③ **私たちを治めておられる**——大祭司としてのイエスは、モーセがそうであったように、信者の共同体の中におられるではありません。彼は、息子が父親の家を治めるように（ヘブ 3:6）、私たちを治めておられるのです。キリストは聖者たちに対する完全な権限を握っておられます。

④ **私たちと同様であられる**——イエスが神であられたという起源は、彼に独占的な権利を与えませんでした。彼は私たちと同じように試練に遭われました（ヘブ 4:15）。ユダの荒れ野における選りすぐりの誘惑が示すように、イエスは肉体的に、精神的に、霊的に、誘惑をお受けになったのです（マタ 4:1～11）。

⑤ **私たちのためになさる**——キリストは天の聖所で、「わたしたちのために」（ヘブ 9:24）神の御前にあらわれ、私たちのために執り成しをされています（ヘブ 7:25）。感謝すべきことに私たちに、代わって裁きの場に出てくださる神の代理人がいるのです。

◆ イエスが天におられるのは、私たちのためです。これはどういうことを意味するのでしょうか。この驚くべき真理から、あなたはいかに確信と安心を得ることができますか。

すでに見たように、地上の聖所の極めて重要な目的は、象徴、予型といった形でイエスの死と大祭司としての働きをあらわすことでした。罪はあまりにもひどいものなので、単に動物の（哀れで不幸な）死によっては解決されません。その代わりに、流されたすべての血は、罪の唯一の解決法、つまりイエス御自身の死を指し示していたのです。罪を贖うためには、イエスの死、「神と等しい者」（フィリ 2:6）の死が必要であったということは、罪がいかに悪しきものであるかを示しています。

問2 ヘブライ 10:1～14 を読んでください。この聖句は、地上の聖所の機能や働きと、イエスの死やその大祭司としての働きとを、いかに対比していますか。

これらの聖句から多くの重要な真理が得られますが、最も重要なものの一つは、これらすべての動物の死では罪の問題を扱うのに不十分だったということです。「雄牛や雄山羊の血は、罪を取り除くことができないからです」（ヘブ 10:4）。それらは解決法を指し示しているだけで、解決法そのものではありませんでした。解決法は、イエスとイエスの死、そして天の聖所における私たちのためのイエスの働きなのです。

これらの聖句の中のもう一つの重要な点に注目してください。キリストの一度きりの死で十分であるという点です。動物のいけにえは、毎日毎日、毎年毎年、何度も繰り返されなければなりませんでした。全人類の罪を覆うために、イエスの犠牲は一度だけで十分でした。神はこの重要な真理を、イエスの死後、地上の聖所の垂れ幕が超自然的に裂けたときに（マタ 27:51）、力強くお示しになりました。

◆ 世界を見回し、罪が引き起こした損害、痛み、喪失、恐れ、絶望といったものに目を向けてください。人生における罪の問題の唯一の解決法として、どのように日々、瞬間瞬間、私たちはイエスに頼ることを学べるでしょうか。

金曜日

さらなる研究

11月22日

「サタンの声とサタンの意志に従って行動することから離れ、イエスの御性質を身に付けて、イエスの側に付きなさい。このお方は、苦しみ、悩む者たちの原因を自分のものとできる、敏感で優しい感受性を持っておられる。多く赦した者は、多く愛すのである。イエスは思いやりのある仲保者、憐れみ深く、忠実な大祭司、天の大君、栄光の王であられる彼は、サタンの誘惑のもとにある有限な人間に同情することがおできになる。人間がサタンの策略を感じていることを知っておられるからである」(エレン・G・ホワイト『キリスト教教育』160 ページ、英文)。

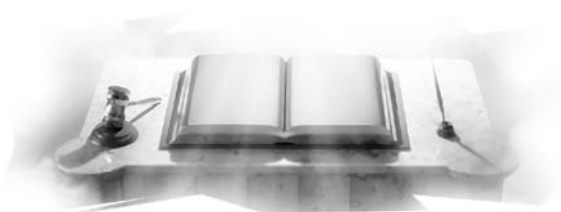
「良心は有罪の宣告から解放されうる。イエス・キリストの血を信じることによって、すべての人が彼にあって完全にされうるのである。感謝すべきことに、私たちは不可能に取り組んでいるのではない。私たちは聖化を自分のものとして要求することができる。神の好意を享受できるのである。私たちが気にかけるべきは、神が私たちの身代わりであられるキリストをどのように思っておられるかということであって、キリストと神が私たちをどのように思っておられるかということではない」(エレン・G・ホワイト『セレクトッド・メッセージ』第2巻32、33 ページ、英文)。

考えてみましょう

- ◆ 現在、あなたのために天で執り成しをしている人間がいるということを、考えてみてください。このことは、神の目に映るあなたの大切さについて、どのようなことを教えてくれますか。この真理をあなたの生き方や、他者への対応の仕方に反映させるには、どうすべきでしょうか。(火曜日参照)

話し合いのための質問

- ① ヘブライ2:17を読んでください。キリストは私たちの大祭司となられる前に、なぜ人間となり、苦しまれる必要があったのでしょうか。
- ② 私たちの大祭司であられるイエス・キリストは、私たちの救いの保証人であり、ご自分の犠牲と血の効力と恩恵を与えられます。彼が私たちの側に付いておられるので、私たちには恐れるべきものがありません。どのようにしたら私たちはこのすばらしい真理を、ヘブライ人への手紙の中で力強く表現されているように理解し、自分自身に——とりわけ、大きな誘惑に遭っているときに——適用できるのでしょうか。



再臨前審判

●暗唱聖句●

「天下の全王国の王権、権威、支配の力はいと高き方の聖なる民に与えられ／その国はとこしえに続き／支配者はすべて、彼らに仕え、彼らに従う」
(ダニエル 7：27、新共同訳)

「国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与えられる。彼らの国は永遠の国であって、諸国の者はみな彼らに仕え、かつ従う」
(ダニエル 7：27、口語訳)

今週の聖句

ダニエル 7 章、創世記 3：8～19、Ⅱテモテ 2：19、詩編 51：4、Ⅱコリント 5：10

安息日午後

今週のテーマ

11月23日

ヘブライ人への手紙は、イエスが亡くなり、復活されたあと、私たちのために新しい段階の働きを始められた、と明確に示しています。ダニエル 7 章、8 章の幻も、歴史のある時点で、天における私たちのためのキリストのこの働きが、新しい段階、つまり裁きに入ったことを明らかにしています。これは、ときとして「終末論的贖罪日」と呼ばれるものです。「終末論的」とは、これが終末に関するものであり、「贖罪日」とは、これが地上の聖所でなされた贖罪日の務めによって予表されていたものだからです。

今週私たちが注目するダニエル 7 章には、四つの動物によって象徴される一連の王国が登場しますが、それはダニエル 2 章のバビロン、メディアとペルシア、ギリシア、ローマと同じものです。

私たちは今週の研究において、私たちの主なる神が御自分の民のために働いておられるがゆえに、裁きは福音であるということを学びます。見守る全宇宙の前で、神は彼らのために裁き、キリストの永遠の王国——主に従う者としてのあらゆる希望の頂点——への入場を許可なさるのです。

日曜日

幻と裁き

11月24日

「その前から火の川が流れ出ていた。幾千人が御前に仕え／幾万人が御前に立った。裁き主は席に着き／巻物が繰り広げられた」（ダニエル 7：10）。

ダニエル 7：1～14 を読んでください。ここでどのようなことが起きているか見てみましょう。

四頭の獣を見たあと、ダニエルは第四の獣の角の中から別の角が出てくるのを目撃しました。この「小さな角」は、神と聖者たちの最大の敵になります。次に、ダニエルの注意は、暗い地球から、天の御座における明るい裁きの場面へと、急に向けられるのです（ダニ 7：9～14）。

この裁きの場面は幻全体の転換点で、2人の重要人物——「日の老いたる者」と「人の子」——が関わっています。天使たちも、裁きの証人としてそこにいます。この場面は三段階で展開し、最初は裁きの場面（9、10節）、次は地上の獣の権力に対する裁きの結果の場面（11、12節）、そして最後が支配権と王国が人の子に委譲される場面（13、14節）です。父なる神は、威厳のある「日の老いたる者」、卓越して賢く、賢明な裁判官として描かれ、「人の子」は天の法廷における人性を備えたイエス御自身をあらわしています。イエスは御自身を指すためにこの称号を何度もお使いになりましたが、少なくとも二回、ダニエル 7 章のイメージをはっきり想起させる用方をなさっています（マタ 24：30、26：64）。

贖罪日は、この天の神殿における場面にとって、最も自然な予型論的設定として機能しています。実際のところ、あたかも香の煙に包まれた天の大祭司が、「日の老いたる者」の所へやって来るように描かれているのです。ダニエル 7：10には、「巻物が繰り広げられた」とあります。天の裁きにおいて、巻物は主要な役割を果たしています。聖書の中には天に起源を持ついくつかの書物が登場します——「命の書」（詩編 69：29（口語訳 69：28）、フィリ 4：3、黙 3：5、13：8、17：8）、「記録の書」（マラ 3：16）、「命の書」（黙 20：12）〔英訳聖書では「行いの書」〕、「あなたが書き記された書（あなたの書）」（出 32：32、33、詩編 56：9（口語訳 56：8））。

◆ 神によって（あなたが）裁かれている場面、あなたが行ったすべてのことが裁かれている場面を想像してみてください。あなたの実績、行動、善行に頼らなければならないとしたら、どのような望みがあるでしょうか。では、裁きにおける唯一の望みとは何でしょうか。

「調査審判」という概念は、聖書的なものです。神の裁きの手続きには、しばしば調査と審問の段階が伴います。最初の例は創世記3章に記録されており、神はそこで判決を下す前に調査しておられます（創3：8～19）。神がカイン（創4章）、バベル（創11章）、ソドム（創18章、19章）に対応されたときも、同じ様式に従っているのです。私たちは、イスラエルの中に裁判人を要求するという同じ行動を取っておられる神を見ることができます。それは、「尋ね、探り、よく聞いただ（す）」（申13：15〔口語訳13：14〕、申19：18も参照）ためでした。

調査は慎重さと公正さを要し、しばしば公の場でなされます。神は他者に、御自分がしておられることをお見せになります。このようにして、神が判決を下されるときに——それが救いであろうと、有罪宣告であろうと——、見物人たちは、神の決定は最善だ、と確信するのです。これこそがまさに、ダニエル7章の天の裁判に巻物が登場する理由です。巻物は神のためのもの、つまり、神が容易に思い出せるようにするためのものではありません。これは神の周りにいる天の住人、神のようにすべてを知らない者たちのためのものなのです。

問1 聖者たちにとって、裁きはどういう結果になりますか（ダニ7：22）。

裁きについて、エレン・G・ホワイトは次のように書いています。「神の民と認められた人々が、汚れた服を着て主の前に立っているように描かれている事実は、主の名前を公言するすべての者が、深く心を探り、謙虚になるように導くであろう。真理に従うことによって魂を清めつつある者たちは、自分に対して最も謙虚な意見を持つであろう。……しかし、私たちは自分の罪深い状態を自覚すべきである一方、私たちの義、聖化、贖罪としてのキリストに信頼しなければならない。私たちは、私たちに対するサタンの非難に反論することができない。キリストだけが、私たちのために有効な弁護をすることがおできになるのである。キリストだけが、私たちの功績ではなく、彼自身の功績に基づく議論によって、非難する者を沈黙させることがおできになるのだ」（『教会へのあかし』第5巻471、472ページ、英文）。

◆ これらの言葉は、なぜ裁きがすばらしい福音であるのかを理解するうえで、いかに助けとなりますか。

火曜日

裁きの時

11月26日

まず、ダニエル7:7～10、21、22、25、26を読んでください。ダニエル7章の裁きは、いつ行われるのか考えてみましょう。

幻の中でも、天使の説明の中でも、裁きは、角の思い上がりに対する神の応答として始まり、神の聖者たちへの王国の委譲をもって山場を迎えています。また聖書はこの裁きを、角の勢力がまだ存在している間に行われているものとして描いています（ダニ7:8、9）。角の支配権が取り去られるのは、判決が下されたあとです。そうして裁判の手続きが終わったときに、地上のすべての王国は滅ぼされるのです（26節）。

このことが意味しているのは、明らかに、裁きは再臨の前に行われなければならないということです。それは、「一時期、二時期、半時期」（25節）のあとしばらくして始まる再臨前審判なのです。裁きが先行しなかったなら、どうして最終的な報いや罰がありえるでしょうか。

確かに、聖者たちはキリストの来臨のときに報いを受けており、このことは、彼らがすでに裁かれていることを前提とします。同様に、悪の勢力を含む悪しき者たちは、神が最終的な審判を下される前の千年期の間に裁かれるのでしょうか（黙20章参照）。

なぜ神は裁きを必要となさるのでしょうか。「主は御自分の者たちを知っておられる」（Ⅱテモ2:19）のではないのでしょうか。

もちろん、私たちの全能なる神は、だれが御自分の民であるかをよく知っておられます。彼は、だれが救われるのかを決定するために、裁きを必要としておられるわけではありません。そうではなく、再臨前審判は、裁き主が御自分の民を救うことにおいて公正であられるということを示すものです。聖徒たちは救っても安全な存在だ、と天の住人たちが納得する必要があるのです。裁きの意味を理解しようとするとき、私たちはこれらの聖句の中でほめかされている大争闘という筋書きの現実を忘れてはなりません。なぜなら、天使の軍勢が裁きに立ち会っていることを、私たちは知っているからです。ほかの他世界の住人たちも、救済計画の最終的な結果に関心を持っているのです。

◆ 「主は御自分の者たちを知っておられる」。あなたがその1人であると、いかにして確信が持てますか。確信を持つための唯一の方法は、何ですか（ロマ8:1）。

問2 ダニエル7章をもう一度読んでください。再臨前審判の結果はどのようなものですか。

裁きは、広範囲に及ぶいくつかの措置をもって終わります。

①**人の子が王位を受ける**——人の子は「権威、威光、王権」(ダニ7:14)をお受けになります。

②**聖者たちは王国を永遠に受ける**——裁きは聖者たちの益となるものであり、彼らは神の王国(王権)を受けます(ダニ7:22)。間違いなく、人の子と聖者たちは密接なつながりを持っています。人の子が王国を受けるとき、彼は聖者たちも加わるようにと招くのです。彼の王国は彼らの王国なのです(ダニ7:27)。この裁きは、永遠の王国の王が御自分の民と再会するときをもたらしめます。これが、彼と彼らにとっての最大の報いなのです。

③**敵対者たちは敗北し、滅ぼされる**——神の民の敵は裁かれます。角が聖者と戦ったあと、敗北し、永遠に滅ぼされます(ダニ7:25、26)。

④**神の絶対的な正義が示される**——天の法廷における裁きは公の場でなされ、天使たちが人間の事柄に対する審理に立ち会っているので、神がその決定において公平であられることを、だれでも自分の目で確認することができます。神は愛と義の双方を堅持することがおできになるのです。こうして最終的に、神御自身の正しさが証明され、すべての者は、神が公正であり、愛であられることを認めます。このような手続きをすべて踏むことで、全宇宙が永遠に安全な場所となるのです(詩編51:6、ロマ3:4参照)。

再臨前審判は、神と信者双方の希望をかなえる結果で終わります。神の願いは御自分の民を救い、御自分の正義と愛に対する疑いを残さずに、罪を根絶することです。人間の願いは、罪と、あらゆる形での罪の重圧から救われ、彼らを受取る方の前で永遠の命を楽しむことです。従って裁きは、神とその被造物との間の永遠の信頼関係を保証するものとなるのです。

「大争闘は終わった。もはや罪はなく罪人もいない。全宇宙はきよくなった。調和と喜びのただ1つの脈拍が、広大な大宇宙に脈打つ。いっさいを創造されたお方から、いのちと光と喜びとが、無限に広がっている空間に流れ出る。最も微細な原子から最大の世界に至るまで、万物は、生物も無生物も、かげりのない美しさと完全な喜びをもって、神は愛であると告げる」(『希望への光』1930ページ、『各時代の大争闘』下巻467ページ)。

木曜日

信頼できる確証

11月28日

だれもが「わたしをさばってください」（詩篇7:8〔新共同訳7:9〕）と叫ぶのは、なぜでしょうか。理由は単純です。「神よ、御名によってわたしを救い／力強い御業によって、わたしを裁ってください」（詩編54:3〔口語訳54:1〕）とあるように、裁きが救いを意味するからです。詩編26編は、正義と公正を求める痛切な訴えです。ダビデは、裁き主なる神が常に御自分の忠実な民の味方であり、その裁きは期待以上のものだということを見事に表現しています（詩編26:1、35:24、43:1、54:3〔口語訳54:1〕）。裁きには正しさの証明も含意されているのです。

では、再臨前審判は私たちの救いの確証を脅かすでしょうか。いいえ、そのようなことはありません。この裁きの結果は確かであり、「聖徒のため」（ダニ7:22、口語訳）のものだからです。裁きにおける神の働きは、私たちの赦しを改めて明言し、私たちの罪を永遠に無関係なものとすることによって、私たちの確信を強めます。裁きは、私たちのものである救いのもう一つの実際的なあらわれです。裁きは、神が私たちを受け入れるか、拒絶するかを決定なさるときではありません。そうではなく、私たちが神を心から受け入れたか否かの選択、つまり私たちの行為によってあらわされた選択を確定なさるときなのです。

ですから、信者にとって裁きは確信を深めるものであり、もっと根本的な言い方をすれば、裁きはクリスチャンの確信という教理の中心にあるものなのです。

問3 ローマ14:10～12、IIコリント5:10を読んでください。裁きという現実、私たちの生き方にどのような影響を与えるべきですか。

聖書は、正しい者は裁きを免れると教えていません。正しい者は裁きにおいてその正しさを証明され、彼らの罪は永遠に消し去られますが、裁きに対する期待が忠実で責任ある生き方を彼らにさせるのです。このように、救いの確証には、道徳的な行動の動機となる刺激が伴っています。神が私たちのために多くのことを成し遂げられたがゆえに、私たちは彼を愛し、神に求められているすべてのことに忠実であることによって、その愛を表現しようとするのです。

「天の聖所におられる裁判官は、正しいさばきを行われる。彼は、ご自分のみ座を取りかこむ天使たちよりも、罪の世の誘惑にさらされている人類との交わりをお喜びになる」(『希望への光』1253 ページ、『キリストの実物教訓』157 ページ)。

「サタンは自分が神の民に犯させた罪を、正確に知っている。そしてサタンは、彼らが罪を犯したから神の保護を受けられなくなったと言って告発し、自分には彼らを滅ぼす権利があると主張するのである。彼は彼自身と同様に、彼らも神の恵みから除外されるべきであると言うのである。……しかしキリストに従った人々は、罪を犯しはしたけれども、全的に降伏してサタンの手下たちに支配されてはいなかったのである。彼らはその罪を悔い改めて、謙遜と悔恨の念をもって主を求めた。そして助け主であられるイエスは、彼らのために弁護されるのである。彼らの忘恩によって最もひどい取り扱いを受けられた方、また彼らの罪を知るとともに、その悔い改めをも知っておられる方が言われる。『サタンよ、主はあなたを責めるのだ。わたしはこの人々のために、わたしの生命を与えた。彼らは、わたしのたなごころに彫り刻まれている。彼らの品性に不完全なところがあろう。彼らは、努力して失敗したこともある。しかし彼らは悔い改めた。そしてわたしは、彼らを赦し受け入れたのである』(『希望への光』605、606 ページ、『国と指導者』下巻194、195 ページ、一部改訳)。

— 考えてみましょう —

- ◆ あなたの仲間が、神に対する恐れ、特に裁きに対する恐れを口にしたとしましょう。その人が裁きに関する福音を理解し、救いに対する個人的な確信を深められるように、あなたはいかに助けることができますか。(木曜日参照)

話 し 合 い の た め の 質 問

- ① 神の正義、律法、公正さについての疑問が最初に生じたのは、地上においてですか、それとも天上においてですか。あなたの答えは、特になぜ天の裁きがあるのかということを理解するうえで、どのような意味を持っているでしょうか。



終末論的贖罪日

●暗唱聖句●

「彼は続けた、『日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る』」（ダニエル 8：14、新共同訳）

「彼は言った、『二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する』」（ダニエル 8：14、口語訳）

今週の聖句 ダニエル 8 章、黙示録 14：6、7、ダニエル 9：24～27

安息日午後

今週のテーマ

11月30日

聖所のメッセージをより深く理解するために、次の図表を用いてください。これは、先週学んだダニエル 7 章の大いなる裁きの場面が、ダニエル 8：14 における聖所の清めと同じ出来事であることを示すものです。

ダニエル 7 章	ダニエル 8 章	解釈
獅子	—	バビロン
熊	雄羊	メディアとペルシア
豹	雄山羊	ギリシア
第四の獣 小さな角	小さな角	異教ローマ 教皇制ローマ
再臨前審判	聖所の清め	終末論的贖罪日
聖者らへの王国の委譲 (再臨)	—	再臨とそれ以後

私たちは今週の研究において、ダニエル 8 章を学びます。そして、角の勢力と神の対立の実際の問題を知り、1844 年に始まった聖所の清めが、なぜこの問題に対する神の完璧な答えであるかを知りたいでしょう。

問1 ダニエル8：9～14、23～25に焦点を合わせつつ、8章全体を読んでください。小さな角の勢力は、何を攻撃しますか。

角の勢力は、「軍勢の長」（ダニ8：11、新改訳）の礼拝を妨げ（ヨシュ5：13～15と比較）、「日ごとの供え物」（ダニ8：11、12、ヘブライ語で「タミード」——地上の聖所における日々の犠牲の務めを指す）を彼から取り除きます。聖所でこの働きをするのは祭司（しばしば大祭司）ですから、角は（大）祭司の役割を奪い、偽の「軍勢の長」に命じて、「日ごとの供え物」を取り除こうとしたわけです。そして、（教皇制ローマ時代の）預言的文脈で考えるなら、ここで攻撃されているのは、明らかにキリストの大祭司としての働きです。

このように角の勢力は、天の祭司の職責を奪い、地上において繰り返される神への礼拝を妨げます。それは、聖なる天の君とその聖所やその民に対する宗教的戦争を行うもう1人の「軍勢の長」のように振る舞い、地上におけるサタンの道具となります。「彼の力は強くなるが、彼自身の力によるのではない」（ダニ8：24、新改訳）と記されており、その活動は（地上と天上という）二つの世界で戦われている宇宙的戦争を反映しています。

この小さな角は、雄羊（メディアとペルシア）と雄山羊（ギリシア）のすぐあとに続いているため、歴史的にメディアとペルシア（ダニ8：20）とギリシア（ダニ8：21）のあとに登場したローマだと特定されなければなりません。この小さな角は帝国ローマとして始まるのですが、より大きな強調点は、幻の最大の焦点である教皇制ローマに置かれています。

先に述べたように、「日ごとの供え物」（タミード）は、天の聖所におけるキリストの継続的な祭司としての執り成しを指します（ヘブ7：25、8：1、2）。小さな角が「日ごとの供え物」を取り除くというのは、教皇が新たに作り出したもの——仲保的祭司職、ミサ、告解制度、マリア崇拜など——を導入したことをあらわしています。天の聖所におけるキリストの継続的な働きについての知識も、その働きに頼ることも、それらによって見事に取り除かれてしまいました。

◆ 私たちはだれも、神のように振る舞おうとする誘惑から逃れられません。いかにかすかとはいえ、あなたはそうに振る舞っていることがありますか。

月曜日

「いつまで」

12月2日

小さな角の思い上がりは、裁きを叫び求める声がするまで続きます。雄羊や雄山羊がおごり高ぶったのちに滅ぼされたことで（ダニエル 8：4、7、8）、角の勢力が高ぶるのです。こうして、「この幻の出来事は、いつまで続くのか」という問いが發せられます。

問2 どのような具体的問題が、ダニエル 8：13 の質問を生じさせたのですか。

この質問は角のいくつかの——おそらく最もひどい——活動を指摘していますが、問うているのは幻全体の長さです。つまり、ダニエル 8 章の幻の中に示された出来事について尋ねているのです。

聖書において「いつまで」という質問は、現状を変えてほしいという要求を常に意味します。この質問は神や預言者たちによって、人々に向けられています（出 10：3、民 14：27、列王上 18：21）、神の民や主の御使いによって、神に向かって問われてもいます（詩編 94：3、黙 6：10、ゼカリヤ 1：12）。「いつまで」という天使の叫びは（ダニエル 8：13、12：6）、絶え間なく続く苦悩に対する嘆き、変化への嘆願、神の裁きの要求です。このような質問は、神が最終的に勝利なさることへの期待を表明しています。

ゼカリヤ 1：13 において、主が「優しい言葉、慰めの言葉をもって答えられた」ように、ダニエル 8：13 に対する答えは、すぐに与えられます。「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで」（14 節）、あるべき状態に戻るであろう、ということです。

ひとたび、人類の状況と私たちが生きている預言の時について理解したなら、私たちは黙っていることはできません。「いつまで」という叫び声は、広まっていく必要があります。この世界を眺めるとき、私たちは主に、どうか「義の宿る」（II ペト 3：13）新しい世界をもたらしてください、と嘆願せずにはいられません。ダニエル 8：14 で約束されているように、今、神は働いておられますが、地上における悪の支配を終わらせ、繰り返し約束された栄光のうちに戻ってきてくださることを、私たちは希望するのです。

ダニエル 8:14 を読んでください。「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで」、どのようなことが起きるのか見てみましょう。

「日が暮れ、夜の明ける」という表現は、1日をあらわす創造物語における言葉を反映しています（創 1:5、8ほか）。このことは、神が創造の御力を用いて、角とその軍勢の破壊的活動に反撃されることを意味しているのです。創造主は、ダニエル 8:13 の質問によって求められた状況の変化を引き起こされます。

ダニエル 8:14 の答えは、「2300 の朝夕が過ぎると、聖所は回復さ（清められる）」と読むことができます。「回復」に相当するヘブライ語（ツァダク）の同義語を研究してみると、この言葉にはおもに三つの意味があることがわかります。人間関係という文脈においては「回復」を（イザ 10:22）、聖所という文脈においては「清め」を（ヨブ 4:17、25:4）、律法という文脈においては「正しさの証明」（ヨブ 34:5）を意味するのです。この同じ動詞は、善人たちの正しさが証明され、宣告される（王上 8:32、イザ 50:8）裁きにおける神の介入に用いられています。ダニエル 8:14 など「聖所」と訳されているヘブライ語の原義は「聖い（場所）」で、「聖なる民」（ダニ 12:7）との関連でも用いられています。実際、ダニエル 8:24 は、ダニエル 7 章の小さな角の勢力のように、8 章の小さな角の勢力が神の「聖なる民」を攻撃することを明らかにしています。

このように、ダニエル 8:14 の聖所の回復というのは、質問の中で先に述べられたあらゆる問題の解決を包含しています。裁きが小さな角の勢力に下されるだけでなく、聖所は清められ、神の民と神の聖所は本来あるべき状態に戻されるのです。これは、レビ記の贖罪日に起きたことと似ています（レビ 16:20、30）。

ダニエル 8 章における回復の働きは、聖徒たちを支持し、小さな角の勢力に反対する審判が下されたダニエル 7 章の神の裁きと同等のものです。

この世は、ダニエル 8:14 で予告されているように、やがて正義と裁きがもたらされること、今はイエスにあって私たちに提供されている救いを受け取る必要があることを知る必要があります。

◆ 黙示録 14:6、7 を読んでください。これらの聖句は、ダニエル 7 章の裁きと 8 章の聖所の清めとを、いかに直接的に結びつけていますか。

水曜日

ダニエル8章の贖罪日

12月4日

角の攻撃対象は、神の天の聖所とその民です。彼らの将来はどのようなのでしょうか。まさにそれが、ダニエル 8:13 が問うていることです。しかし、聖所と神の民を本来の状態に戻し、それによって神の処置を正当化するのは贖罪日だけです。ですから、ダニエル 8:14 の答えは、贖罪日の活動に違いありません。実際、贖罪日は、ダニエル 8 章の幻の山場に見いだされるのと同じ重要な主題——聖所、聖所と民の清め、裁き、創造——を示している唯一の儀式の日です。

また、ダニエル 8 章の中には、贖罪日をほのめかす言葉がいくつかあります。角は「(荒らすことをなす) 罪」(ダニ 8:12、13、口語訳) によって振る舞っていますが、この言葉はレビ記 16:16、21 にはっきり出てきます(口語訳「とが」)。これは反抗的な罪のことで、聖所は贖罪日にしか、この罪から清められません。「聖所」と訳されている「聖い(場所)」(ヘブライ語で「コーデシュ」という言葉は、ダニエル 8 章と、至聖所を指すためにこの言葉が用いられているレビ記 16 章(2、3、16、17、20、23、27、33 節)を明確に結びつけています。「聖所はあるべき状態に戻る」という表現は、「聖所」が「荒らすことをなす罪」(レビ 16:16、21) から清められる贖罪日を連想させます。雄羊や雄山羊といった特定の動物の比喩が用いられていることも(レビ 16:5)、贖罪日をほのめかしています。さらに雄山羊は「毛深い」(ダニ 8:21) とされており、この表現は贖罪日の二匹の雄山羊にも用いられているのです。

宗教の領域における角の戦いは、終末論的贖罪日という文脈の中で実行された神の介入によって反撃され、打ち止めとなります。そしてついに、恐怖はやみ、神の民、真の礼拝、聖所は本来の状態に戻り、最終的に神の正しさが証明されるのです。神が贖罪日に、忠実な者たちを救し、不忠実で反抗的な者たちを裁くという処置と裁きにおいて御自分の正しさを具体的に示されたように、終末論的贖罪日は、救うときにも、罰するときも、神が公正であられることを実証するでしょう。

◆ ダニエル 8:14 からほかに何を学べるにせよ、この聖句は、これほど長い歳月のあとでさえ、主は私たちに対する約束を忘れておらず、悪を懲らしめ、聖人たちに報いられる、と語っているのです。とりわけ試練のときに、あなたはいかにしてこの約束にすがり続けますか。結局的ところ、これらの約束がなければ、私たちにはどのような希望があるのでしょうか。

ダニエル 8:13 の質問の中に出てくる「幻」（ヘブライ語で「ハーゾーン」）は、ダニエル 8:3～11 の幻全体を指しており（ダニ 8:1、2、13、15 参照）、メディアとペルシア（雄羊）からギリシア（雄山羊）、教皇制ローマ（小さな角）に至る時代を包含しています。それゆえ、幻の長さが「日が暮れ、夜の明けること二千三百回」と示された時点で、私たちは、それがメディアとペルシアから終わりの時までの期間に及ぶと理解すべきです。聖句は繰り返し、幻が「終わりの時」（ダニ 8:17、19）に関係するものであり、「まだその日は遠い」（ダニ 8:26）と強調しています。歴史的な長さから見て、文字どおりの2300日では、幻のこの期間にはまったく足りません。ですから私たちは、エゼキエル 4:5、6 や民数記 14:34 の例に従い、「日＝年」の原則によってこれを2300年と解釈する必要があります。

しかし、疑問は残ります。この2300年は、いつから始まるのでしょうか。ユダヤ教の学者も、キリスト教の学者も、ダニエル 8:14 と 9:24～27 の間に強いつながりを見ており、それはメシア（イエス）の到来を指し示す明確な預言だと、長い間みなしてきました。

ダニエル 9:24～27 を読んでください。これらの聖句の中で、どのようなことが起きていて、ダニエル 8:14 と、どのようにつながっているかを見てみましょう。

「幻」（ハーゾーン）という言葉がダニエル 8 章の預言全体を指している一方で、やはり「幻」と訳されている「マレー」という言葉は、特に「夜と朝の幻」（ダニ 8:26）を指しています。ダニエルが理解できなかったのは（ダニ 8:27）、2300 日に関するこの「幻」です。そのほかのことは、天使がすべて説明しました。

数年後、その同じ天使ガブリエルがダニエルの前にあらわれ、メッセージを届けます。ダニエルがこの2300日の「幻 [マレー] を理解」できるようにするためです。その70週の預言は、私たちがダニエル 8:14 の預言的時間の要素を理解するうえで、助けとなります。ダニエル 9:24 の最初の動詞「定められている」は、「割り当てられている」とか、「切り取られている」というのが最適な訳で、70週が、より長い2300日という期間の一部であることを明確に示しています。それゆえ、70週の預言は、ダニエル 8:14 の2300日の預言から「切り取られている」ものなのです。このことが私たちに、ダニエル 8:14 で描かれている預言の期間の起算点を教えています（詳細は明日の研究をご覧ください）。

金曜日

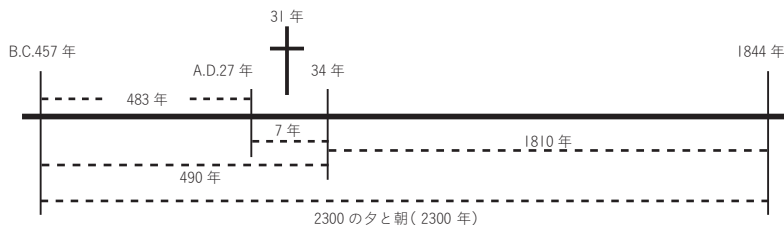
さらなる研究

12月6日

『希望への光』1793～1804 ページ (『各時代の大争闘』下巻 119～150 ページ)。

ダニエル 9:24～27 を読むと、70 週の始まりは、「エルサレム復興と再建についての御言葉〔命令 (口語訳)〕が出されてから」(ダニ 9:25) ということになっています。エズラ記はエルサレムとその神殿に関する命令が三回出されたと報告していますが、エズラ 7:12～26 に記されている三回目の命令だけが、最も有効なものでした。ペルシアの王アルタクセルクセス I 世は、紀元前 457 年にその命令を発しました。それには、神殿の再建と、政治と行政の中心地としてのエルサレムの復興 (エズ 7:25、26) の両方が含まれており、聖書の中でこの命令だけに、王の心に働きかけられた神を称える感謝の言葉が続いています。さらに、紀元前 457 年を起算点とすることによってしか、70 週 (つまり 490 年) はダニエル 9:25～27 の「油注がれた君」、つまりキリストの時代に達しません。

このように 70 週の預言は、2300 日の始まりの年を推定するのにふさわしい出来事を教えてくれています。2300 日は紀元前 457 年に始まり、2300 年後の紀元 1844 年に終わります。



考えてみましょう

- ◆ あなたはどのような状況において、「いつまで」と神に尋ねたことがありますか。目の前の状況がいかに悲惨であろうと、また、あなたを変えてほしいと願っていることの解決にどれほど時間がかかろうと、神が確かに支配しておられるという確信を、あなたはどのようにして保ち続けますか。(月曜日参照)

話し合いのための質問

- ① もし可能であれば、ダニエル 8:14 と 9:24～27 のつながりに関するもっと詳細な情報を手に入れ、両者の密接な関係について研究してください。その研究は、ダニエル 8:14 の (ほかの重要な預言と密接に関係しているという) 重要性について、どのようなことを教えてくれるでしょうか。



私たちの預言的メッセージ

●暗唱聖句●

「わたしはまた、別の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて来て、大声で言った、『神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい』」（黙示録 14：6、7、新共同訳）

「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め』」（黙示録 14：6、7、口語訳）

今週の聖句

黙示録 10 章、ダニエル 12：4～9、黙示録 14 章、11：17、18、
黙示録 13 章、創世記 7：11、11：1～9、エレミヤ 50 章、51 章

安息日午後

今週のテーマ

12月7日

ダニエル 7 章、8 章の裁きのメッセージは、黙示録 12 章から 14 章にかけて描かれている大争闘のシナリオと直接つながっています。そこに見いだされる三天使の使命には、「創造」「裁き」「福音」という主題が含まれており（黙示録 14：6～12）、これらの聖句は、イエスの再臨に備えよ、という神の緊急にして最終の呼びかけを伝えているのです。

第一天使のメッセージは、「永遠の福音」と確かに記されています。なぜならそのメッセージは、使徒たちが、「このような愚にもつかぬものを捨てて、天と地と海と、その中のすべてのものをお造りになった生ける神に立ち帰るように」（使徒 14：15、口語訳、4：24 と比較）と説いたのと同じ真理だからです。このメッセージの重要性を際立たせているのは、ヨハネの黙示録の中で「福音」という言葉がここにしか出てこないという事実です。私たちが終末時代の出来事について何を宣べ伝えようと、「福音」こそがその中心であることを私たちは確認しなければなりません。

日曜日

失望の時

12月8日

黙示録10章を読んでください。ここに小さな巻物を持った天使が出てきます。この天使に関する描写は、黙示録1章に出てくるキリスト（黙1:13～16）やダニエルの最後の幻に出てくる「麻の衣を着た人」（ダニ10:5、6、12:5～7）を思い起こさせます。つまり、これらの人物の同一性が示唆されています。この人はダニエル12:6、7において、「一時期、二時期、そして半時期」（1260年）の預言を与える際に、「永遠に生きるお方」によって誓っています。これは、神の民がひどい迫害に遭うと記しているダニエル7:25の重要な預言の繰り返しで、ダニエル12:7にも出てくるものです。

ダニエル書は終わりの時まで封じられることになっていて、それがやがて開かれ、多くの者がそこから知識を得ます（ダニ12:4～9）。1260年の預言の期間が終わるとき、さらなる知識のためにこの書は開かれます。このことが、黙示録10章の天使の手の中にある開かれた巻物によって象徴されています。それ以降、ダニエルの預言はより深く理解されることになっていました。

同時に黙示録10章は、その体験が決して喜ばしいものでないことを明らかにしています。命じられるままにヨハネが巻物を食べると、それは、口には蜜のように甘かったものの、腹では苦かったのです。ヨハネは、ダニエル書を自分のものとして理解した人々を象徴的にあらわしています。私たちは、この預言的記述がミラライト運動によって成就したと信じています。この運動は19世紀前半に、終末時代の出来事に対する大きな関心を世界的に呼び起こしました。またこの記述は、ダニエル書の長い期間についての預言が自分たちの時代を指していると理解した者たちが、最初の予想に反して、苦い失望を味わうと述べています。「日が暮れ、夜の明けること二千三百回」というのは、キリストの再臨の合図ではなく、ダニエル7章の大いなる裁きの場面の始まりの合図でした。

ヨハネは苦い体験をした直後に、「多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて、再び預言しなければならない」（黙10:11）と言われます。これは、セブンスデー・アドベンチストが「永遠の福音」を説くことで成就されつつあります。

◆ 失望はクリスチャンと無縁ではありません。とりわけ、彼らが出来事を誤解するときにそう言えます。確かに、主の死と復活の間の弟子たちの経験は失望であり、1844年のミラライト運動の経験もそのようなものでした。信仰を失うことなく、私たちはどのように失望に対処することができのでしょうか。失望の時期に、あなたは聖書のどの約束にすがりますか。

問1 第一天使のメッセージは、「神を畏れ……なさい」と告げています。それはどのような意味でしょうか（詩編 34：8～23〔口語訳 34：7～22〕参照）。

「畏れ」は、ふたとおりに理解されます。第一に、崇敬や尊敬という意味での畏れがあります。第一の天使が私たちに注意を喚起しているのは、この種の畏れです。神を畏れる者たちは、神の真の信者です（黙 11：18）。神を畏れるとは、神に敬意を払い（黙 14：7）、神をたたえ（黙 19：5）、神に従い（黙 14：12）、御名に栄光を帰す（黙 15：4）ことです。第一の天使のメッセージにおける神への畏れは、神を裁き主、創造主として認め、神をそのような方として礼拝しなさい、と私たちに求めます。

第二に、遅かれ早かれ、神がこの世を裁かれることを恐れる、という意味での畏れがあります。主に背く者たちにとって、裁きのメッセージは恐怖のメッセージです。ですから、私たちはしばしば三天使のメッセージを、この世に対する神の最終「警告」と呼んだりします。もともと「警告」という概念には、何か恐れるべきものが含まれており、失われた者たちが遭遇することについて私たちが読むとき、確かに彼らは何か恐れなければならないものを持っているのです。

しかし、憐れみが得られる限り、神は失われた者たちを悔い改めへ導きたいといつも望んでおられ、神に対する恐れは、神を探し求めるための刺激になりえます（黙 11：13 参照）。最終的に、神との救いの関係は愛に基づくものですが、人間はときとして自分の目を開かれるために、大きな恐れを必要とするのです。しかも、もし彼らの注意を引くために警告が必要であるなら、それもいいのではないのでしょうか。

◆ 「神は愛である」ということを、私たちは知っています。そして、十字架以上にその愛をあらわしているものはありません。神がこの世を愛しておられること、罪がこの世になしたことをご覧になるのは神にとって大きな苦痛であるに違いないことも、私たちは知っています。愛と義の神は、永遠に傍観したり、悪が罰せられないままにしたりなどなさいません。「生ける神の手に落ちるのは、恐ろしいことです」（ヘブ 10：31）。私たちに對する神の愛と、私たちに多くの危害を加えてきた悪に對する神の怒りの双方を理解するには、どのように折り合いをつけることができますか。

火曜日

諸国民の怒り

12月10日

黙示録 14:7 を読んでください。ここで明らかにされている裁きは、黙示録 14:14～20 に記されているキリストの再臨の前に始まります。それゆえ、これはダニエル 7 章の再臨前審判と同じものです。ダニエル 8:14 が 1844 年としているその開始は、三天使のメッセージが人々に、神を礼拝し、獣とその「像」から離れよ、と命じている事実と一致します。この「像」は、紀元 1798 年に終わった（1260 日と同じである）預言的 42 か月が過ぎた直後に出現しました（黙 13:3～5、12～14）。

黙示録 14:6～12 における最後の呼びかけがなされるとき、恵みの扉はまだ開いています。なぜなら、人々は依然として、バビロンを離れ、真の神を礼拝しなさい、と呼びかけられているからです。

問2 神の裁きはどれほどの範囲に及びますか（黙 11:17、18）。

神は御力をあらわすことによって、諸国民の怒りに応じられます。黙示録 13 章はこの怒りを描写しており、それはサタンが煽り立てたものなのです（黙 12:17）。長年にわたって神の裁きを懇願してきた、抑圧されている信者の側からすれば、裁きは遅すぎるように思えます。しかし、それは預言されたとおりの時に始まり、終末論的贖罪日は神の御計画どおりにやって来るのです。

黙示録 11:17、18 は、神の裁きを簡単に説明しています。それは天で始まり、人類を墮落させた邪悪な勢力を神が滅ぼされるときに（黙 19:2）、地上にもたらされます。神の御怒りは天の聖所で始まり、七つの災いによって降り注がれるのです（黙 15 章～18 章）。

再臨のとき、神は忠実な者たちに報いを与え（黙 22:12）、死者を裁き、悪を根絶なさいます（黙 20:11～15）。そしてすべてが終わったとき、神の御品性は、見守る全宇宙の前でその正しさを証明されるのです。だれもが、神はあらゆる点において正しく、公平であられることを理解します。現時点で私たちに課せられた挑戦は、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして神にすがり、これらすべてが神の指定されたときに起こると信じ続けることです。

黙示録の中心は礼拝です。(しばしば「偽の三位一体」と呼ばれる) 竜、海から上って来た獣、地中から上って来た獣たちが、この世を一つにして彼らを拝ませようと協力する一方で(黙 13:4、8、12、15、14:9、11 参照)、神は人類に、創造主を礼拝しなさい、とお命じになります(黙 14:7)。「獣の像」を拝まない者たちは一時的な命を失う危険にさらされますが(黙 13:15、ダニエル 3 章参照)、獣の像を拝む者たちは永遠の命を失うのです(黙 14:9～11)。なんという違いでしょうか

問3 黙示録 14:12 を読んでください。この聖句は、最後の争いにおいて、神の掟(戒め)がどのような役割を果たすと教えていますか。

礼拝は神の戒めと密接につながっています。黙示録 13 章と 14 章は、十戒に対するさりげない言及——「像」(黙 13:14,15、14:9,11)、「冒瀆」(黙 13:1,5、6)、「安息日」(黙 14:7)、「殺し」(黙 13:10,15)、「みだら」(黙 14:4,8)——であふれています。最後の「それ[試練]は、神の戒めと人間の戒めとの間の争いである」(『希望への光』462 ページ、『国と指導者』上巻 156 ページ)。

進化論が普及して以来、6 日間での天地創造という私たちの信仰を堅持することが、非常に重要になりました。この教えは、私たちが神を創造主として礼拝する基礎だからです。聖書を信じると主張するような種類の進化論であったとしても、進化論は、セブンスデー・アドベンチストが支持するあらゆるものを破壊します。創造がなければ、ほかの教え(例えば、安息日)とともに「永遠の福音」に対する信仰は著しく傷つか、意味を失うことさえあるのです。

「天と地、海と水の源を創造した方」という言葉は、安息日の戒め(出 20:11)にさりげなく言及しています。安息日は、神の戒めを巡る争いの主要な問題です。ほかの戒めとは違い、指定された礼拝の日は忠誠心を試すのに適しているからです。私たちが安息日を守るのはひとえに、そうしなさい、という神の御命令によります。創造はまた、裁きとも密接に関係しています。「水の源」(黙 14:7)という言葉は、洪水(創 7:11)をほのめかすとともに、この世の正しい裁き主(Ⅱ ペト 3:5～7)としての神を指し示しています。

木曜日

聖なる者たちの「忍耐」

12月12日

黙示録の第二天使、第三天使のメッセージは、第一天使のメッセージの神の召しに耳を傾けなかったすべての者に対する警告です。もし人々が誤った道を歩み続けるなら、彼らは神の最後の七つの災いを被ることになります。これらの災いは「神の怒りのぶどう酒」(黙 14:10) とみなされており、このぶどう酒はバビロンにとどまる者たちに注がれます。

聖書の中で、バビロンは神に対する反逆をあらわしています(創 11:1～9、エレ 50 章、51 章)。バビロンは傲慢^{ごうまん}にも神に取って代わる、神の民の敵です。新約聖書の時代には、バビロンはローマをあらわす隠語になっていました(I ペト 5:13)。黙示録において淫婦バビロンは、神と神の民に対抗する宗教的・政治的勢力で、そのようなものとしてこの世を支配しようとします。黙示録 13:15～17 には、黙示録 13 章の獣の勢力が神の残りの民を迫害するために協力する際の「バビロンによる危機」が描かれています。このようにバビロンは、背教した諸教会とこの世の墮落した政治勢力との、終末時代における同盟の象徴です。

三天使のメッセージはバビロンの中にいる神の信奉者たちに、そこを出て、目に見える忠実な終末時代の神の残りの民に加わりなさい、と命じています(黙 18:4、5)。そうです! 忠実な残りの民がまだバビロンの中において、彼らはセブンスデー・アドベンチストの終末のメッセージを聞く必要があるのです。

昨日の研究で見たように、黙示録 14:12 は神の忠実な残りの民のことをはっきり記しています。聖なる者たちの「忍耐」とは、敵対行為を受身的に耐えることではなく、むしろキリストを断固として待つことを言いあらわしています。信者は戒めに従うだけでなく、戒めをこの世に宣べ伝えます。

同時に、「イエスの信仰」(英訳)という言葉は、「イエスに対する[信者の]信仰」とともに、信者を最後まで忠実に導かれる「イエスの誠実さ」をも指しています。第三天使のメッセージの終わりの部分は、私たちの目をキリストに向けさせるものです。キリストの功績と誠実さによって、神の民は耐え、神の戒めを守ることが出来ます。「信仰による義のメッセージは第三天使のメッセージですか、と問う手紙が何人かの人から寄せられたので、私はこう答えました。『それは第三天使のメッセージそのものです』と」(『セレクトッド・メッセージ』第 1 巻 372 ページ、英文)。

三天使のメッセージに関して、エレン・G・ホワイトの次の文章を参照してください。第一天使のメッセージについては、『希望への光』1737～1775ページ（『各時代の大争闘』上巻385～407ページ、下巻1～74ページ）。第二天使のメッセージについては、『希望への光』1781～1804ページ（『各時代の大争闘』下巻1～74ページ）。第三天使のメッセージについては、『希望への光』1804～1819ページ（『各時代の大争闘』下巻151～185ページ）。

「クリスチャンと公言するすべての者の中で、セブンスデー・アドベンチストはこの世にキリストを掲げることにおいて先駆けとなるべきだ。第三天使のメッセージの宣布は、安息日の真理の提示を求める。この真理は、メッセージに含まれるほかの真理とともに宣布されるべきだが、人々を引きつけるべき大いなる中心であられるキリスト・イエスを忘れてはならない。憐れみと真理が出会い、義と平和が接吻するのは、キリストの十字架においてである。罪人はカルバリーを見るように導かれなければならない。幼子の単純な信仰をもって、罪人は救い主の功績に頼り、彼の義を受け、彼の憐れみを信じなければならない」（『福音宣伝者』156、157ページ、英文）。

— 考えてみましょう —

- ◆ セブンスデー・アドベンチストである私たちが信じていることは、もし創造主としての神から切り離されるなら、意味を成しません。また、安息日ほど、神の創造者としての明白なしるしはありません。あなたはどれくらい真剣に安息日を受け止めていますか。（水曜日参照）
- ◆ 神の戒めがいかに最終危機の中心であるとしても、エレン・G・ホワイトは、信仰による義が第三天使のメッセージそのものだ、と言っています。このことは、何よりもまず、私たちが最終危機を乗り越える大いなる希望として、イエスと救済のための彼の功績に頼らなければならないということを理解するうえで、いかに助けとなりますか。（木曜日参照）

話し合いのための質問

- ① 私たちの社会や私たちの日々の関わりにおいて、警告は重要な役割を果たしています。多くの場合、警告は、警告される者たちの益のためになされます。私たちは三天使のメッセージの中に見いだされる恐ろしい警告を、すばらしい希望を示すような形で、いかに伝えることができるでしょうか。



神の御品性を巡る宇宙的争い

●暗唱聖句●

「わたしはまた、祭壇がこう言うのを聞いた。『然り、全能者である神、主よ、あなたの裁きは真実で正しい』」

(黙示録 16：7、新共同訳)

「わたしはまた祭壇がこう言うのを聞いた、『全能者にして主なる神よ。しかり、あなたのさばきは真実で、かつ正しいさばきであります』」

(黙示録 16：7、口語訳)

今週の聖句

エゼキエル 28：12～17、イザヤ 14：12～15、
ヨブ 1：6～12、ゼカリヤ 3：1～5、Iヨハネ 4：10、
IIテモテ 4：8、エゼキエル 36：23～27

安息日午後

今週のテーマ

12月14日

セブンスデー・アドベンチストは、「キリストとサタンとの間の大争闘」という聖書的概念によって現実を理解しています。哲学用語を用いるなら、これは「メタ・ナラティブ」——私たちの世界と其中で起きることを説明するための「大きな（包括的な）物語」——なのです。

この争いの中心は聖所であり、この聖所が、これまで見てきたように、救済史の最初から最後に至るまで繰り返されている（イエスの死による人類の贖いという）主題を提示しています。また、聖所のメッセージは正しく理解されるなら、天で大争闘が始まって以来、サタンが攻撃し続けている神の御品性を説明するうえでも役立つのです。

私たちは今週の研究において、キリストとサタンとの間の大いなる争いにおけるいくつかの重要な出来事について学びます。それらの出来事は、神の御品性に関する真実を明らかにし、サタンの嘘を白日のもとにさらします。

問1 エゼキエル 28：12～17 とイザヤ 14：12～15 を読んでください。
これらの聖句は、ルシファーの墮落についてどのようなことを教えてくれますか。

一見すると、エゼキエル 28：12 は地上の君主について語っているにすぎないように思えます。しかし、いくつかの側面から、実際にはサタンに言及しているということがわかるのです。

第一に、この存在は「翼を広げて覆うケルブ」(エゼ 28：14) と呼ばれています。これは、地上の聖所の第二の部屋(至聖所)で、契約の箱と贖いの座あがなを覆っていた一對のケルビムを思い起こさせます(出 37：7～9)。またこの天上の存在は、「神の聖なる山」(エゼ 28：14) にいて、火の石の間を歩いたことがあるとともに、神の園である「エデン」(エゼ 28：13) にいたということです。これらの言葉も聖所を連想させます。彼を包んでいた宝石は九つで(13 節)、これらの宝石は大祭司の胸当てに見いだされます(出 39：10～13)。このように、この箇所だけでも、聖所への言及がまだあります。

このケルブの抜きん出た輝きについて記したあと、聖句は彼の墮落へと進んでいきます。彼の心は自分の美しさのゆえに傲慢になり、彼の知恵こうまんは自分の輝きのゆえに墮落し、「取り引き」(エゼ 28：16,18) ——恐らく、神の御品性を中傷し、反乱を引き起こしたことを指しているのでしょう——は彼を暴力的にしました。

また、おごり高ぶった地上の勢力は、天上へ向かおうとしますが、イザヤ 14：12～15 において、「曙あけぼのの子」(古ラテン語で「ルキフェル」。ルシファーという名はこの言葉から)は逆の方向へ向かっています。彼は天から地に落ちており、このことは、彼が地上で生じたものではなく、超自然的に生じたものだとと伝えています。ほかに、「(神の星よりも高い) 王座」「神々の集う北の果ての山」「いと高き者」といった語句も、彼が天上の存在であるという印象を強めています。12 節、13 節の動詞が過去形であるのに対して、15 節では突然未来形になっています。この時制の変更は、かつて天から地へ落とされたことがあったが(イザ 14：12)、未来のいつの日か、今度は地上から「陰府よみ」(墓穴)に落とされることを示しています。これはバビロンのいずれの王にも当てはまりません。明らかに、ルシファーのことを指しています。

月曜日

非 難

12月16日

天から落とされたあと、サタンは神の御品性を歪めて伝え、中傷しようとした。彼は、地上における最初の「聖所」であるエデンの園の真ん中において、これを実行しています（創3:1～5）。サタンは天の聖所で始まった反逆を、エデンという地上の聖所に持ち込んだのです。彼は蛇を通じてエバとの接触を始めると、神はアダムとエバにとって益となるものを与えずにおられるのだ、2人が持つべきものを出し惜しんでおられるのだという考えを、彼女の心にあからさまに植えつけました。このようにして、実に巧妙に、彼は神の御品性を捻じ曲げて伝えたのです。

アダムとエバが罪に落ちたことで、サタンは一時的にこの世の王位に就きました。いくつかの聖句は、サタンが今や「この世の支配者」（ヨハネ12:31）として、つまり泥棒と同じように、真の所有者ではないけれどもこの世を持っている者として、再び天の法廷に参加したことを示唆しています。

ヨブ1:6～12とゼカリヤ3:1～5は、天における大争闘の様子を垣間見せてくれます。サタンはヨブの義を単なるご都合主義——「いい子にしていれば、神は祝福してくださる」という考え——として訴えています。その含みは、ヨブが神に仕えているのは、神が尊敬すべき方だからという理由によるのではなく、そうすることが最善の利益になるからなのだ、ということです。ひとたび、神にお仕えすることが祝福をもたらさないと明らかになれば、ヨブは信仰を捨てるだろう、というのです。

大祭司ヨシュア（聖所のモチーフ）や他の信者たち（黙12:10 参照）については、エレン・G・ホワイトが次のように述べています。「サタンは、神の子供たちを非難し、できれば彼らを絶望におとしめようとしている。彼は、神の民の悪行と欠点を神の前に述べたてる」（『希望への光』1249 ページ、『キリストの実物教訓』148 ページ）。

しかし、上記のいずれの場合においても、真の問題は神の正義です。あらゆる非難の裏にある問いは、神がその扱いにおいて公平かつ公正であられるか否か、なのです。神の御品性が裁判にかけられます。神が罪人を赦されるなら、それは公平でしょうか。もし神が不正な者たちを正しいと宣言なさるなら、神は公正でしょうか。神が公正であられるなら、不正な者たちを罰しなければなりません。もし神が慈悲深いのであれば、彼らを赦さなければなりません。神はいかにして公正であり、また慈悲深くあることがおできになるのでしょうか。

神は当初から、いつの日かサタンの非難を無効にし、御自分の究極の愛と正義を行動で示すことを明確になさっておられました。神の正義は、人類の罪に対する罰の償いを要求します。神の愛は、人間を神との交わりへ回復しようとします。神はいかにして、その両方をあらわすことがおできになるのでしょうか。

神の愛と正義の御品性は、キリストの死によって十全に示されました。神は私たちを愛し、人間の罪に対する贖いの犠牲とするために御子を^{つぐな}送られました（Ⅰヨハ4:10、ヨハ3:16）。律法を犯した罰を御自身が償うことで、神は正義を示されたのです。律法の要求は満たされなければならず、それは十字架において、イエスによって満たされました。

同時に、この正義の行為によって、神は恵みと愛をもお示しになることができました。イエスの死は身代わりの死だったからです。イエスは私たちに代わって、**私たちのために**死なれました。それゆえ、私たちは自分の力で死に立ち向かう必要がありません。これは驚くべき福音です。神御自身が、御自分の正義が要求する刑罰を、法的には私たちが受けるべき刑罰を、自ら受けられたというのです。

ローマ3:21～26は、神の義とイエス・キリストによる贖いという主題を扱った重要な聖句です。キリストの犠牲的死は、「御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるため」（ロマ3:26）の、神の義の実際的な証明でした。

ここでもまた、聖所の比喩がキリストの死に枠組みを与えています。これまでの週において私たちは、彼の死が完全な身代わりの死であり、キリストが「償いの^{ふた}蓋」（ロマ3:25、28ページ参照）であることを見てきました。要するに、旧新両約聖書は、キリストの使命が地上の聖所の務めによって具現化されていることを明らかにしています。

◆ 「他世界は、主が立ちあがって地の住民を一掃されるのを見ようと、強い関心をもって見守っていた。……ところが神は、この世を滅ぼすどころか、かえってこの世を救うためにみ子をつかわされた。……サタンがまさに勝利しようとするかのようにみえたその危機に、神のみ子が神の恵みという大使の印を帯びてこられた」（『希望への光』684、685ページ、『各時代の希望』上巻27、28ページ）。この引用文は、神の御品性についてどのようなことを教えてくれますか。

水曜日

裁きにおける正しさの証明

12月18日

聖書が示しているように、神の裁きは、彼を信じ、彼を頼り、彼に忠実である私たちにとって福音です。たとえ私たちが、「私たちに対するサタン^{サタン}の非難に反論できない」（『教会へのあかし』第5巻472ページ、英文）にしても……。しかし、裁きは私たちだけのものではありません。これは、全宇宙の前で神の正しさを擁護することにも役立ちます。

神の御品性は、その裁きの中にあらわされます。アブラハムがすでに理解していたこと——「全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか」（創18：25）——が、最終的にすべての人類に示されます。開かれた巻物による調査を伴う裁きの別の側面は、（再臨前審判において）天使たちと（千年期審判において）義人たちが、人類の扱いにおける神の公正さ、それぞれの訴訟^{そしょう}における神の慈悲深さを証明し、安心することです。

問2 フィリピ2：5～11を読んでください。これらの聖句は、どのような驚くべき出来事について記していますか。

9～11節は、キリストの高挙（神によって高く挙げられること）について記していますが、ここでの主要な二つの行為は、同じ考え——イエスは主であり、すべての被造物はイエスを主として認めるだろうということ——をあらわしています。第一に、「あらゆるものがひざをかがめ」（10節、口語訳）ています。ひざまずくというのは、人の権威を認めることをあらわすためのお決まりの行為です。ここでは、キリストの最高の主権を認め、彼に敬意を表することを意味しています。この敬意は、普遍的な広がりを持つものです。「天上のもの、地上のもの、地下のもの」（10節）には、すべての生きている者——天上の超自然的存在、地上の生きている人、復活した死者——が含まれます。敬意を表する者たちは、救われる者たちに限定されないようです。失われた者たちですら、すべての人がキリストの支配権を認めます。

第二の行為は、すべての人によってなされる「イエス・キリストは主である」（11節）という告白です。最終的にだれもが、キリストを主として高挙したことにに関して、神の正義を認めるのです。あらゆる被造物はこうにして、大争闘^{だいそうとう}的となっていた神の御品性が、公正で、誠実なものである、と認めることになります。キリストの大敵であるサタンでさえも、神の正義を認め、キリストの主権にひれ伏すのです（『希望への光』1926ページ、『各時代の争闘』下巻456ページ参照）。

山上の説教の中で、イエスは次のようなすばらしいことを言っておられます。「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである」(マタ5:16)。イエスはこの言葉によって、聖書のあらゆる所に記されているにもかかわらず、誤解されやすい一つの原則を明らかにしておられます。その原則は、キリストの弟子として、私たちが自分の行動で、どのように神に栄光(または恥)をもたらしことができるかを教えています。

エゼキエル 36:23～27 を読んでください。これらの聖句には、新しい契約に関する典型的な表現が含まれています。神は御自分の民を劇的に変えたいと願っておられます。神は彼らを「清め」(25 節)、「新しい心」と「新しい霊」を与え(26 節)、神の戒めに従う聖なる民になさるのです。神が成し遂げたいと望んでおられるのは、信者を義なる者とし、聖め、彼らが自分の生活によって神をほめ称えるようにすることです(23 節)。

言うまでもなく、神の御品性の正しさを全宇宙の前で証明するための鍵となる要素は、十字架です。「サタンは自分の仮面が引きはがされたことを知った。彼の統治は墮落していない天使たちと天の宇宙の前に公開された。彼は殺人者の正体を現した。神のみ子の血を流すことによって、彼は天の住民の同情をまったく失ってしまった」(『希望への光』1079 ページ、『各時代の希望』下巻 286、287 ページ)。

同時に、新約聖書に出てくるキリストの弟子たちは、「世界中に、天使にも人にも、見せ物となった」(I コリ 4:9) と記されています。つまり、私たちがすることは、ほかの人たちからだけでなく、天使たちからも見られているのです。私たちはどのような証しをしているのでしょうか。私たちは自分の生活を通して、「いろいろの働きをする神の知恵(を)……天上の支配や権威に知ら」(エフェ 3:10) せることもできれば、私たちがお仕えしていると告白する主の御名に、恥と非難をもたらしこともできるのです。

◆ ほかの人や天使に対して、あなたの生活はどのような見世物になっていますか。それは、あなたがキリストの弟子であると公言するゆえに、神に栄光を帰すようなものでしょうか。それとも、サタンが喜ぶようなものでしょうか。

金曜日

さらなる研究

12月20日

『希望への光』13～19ページ（『人類のあけぼの』上巻1～16ページ）。

「この世に、父なる神を完璧に代表なさるお方、その品性と行動によって神に対するサタンの虚偽の説明に反論なさるお方が立っておられた。サタンは、自分自身の性格を神のせいにしてきた。彼は今や、キリストの真の御品性のうちにあらわされた神——いかなる者も滅びることを望まず、すべての者が悔い改めて自分に立ち帰り、永遠の命を得てほしいと望んでおられる、思いやり深く、情け深い父なる神——を見たのである」（『セレクトッド・メッセージ』第1巻254ページ、英文）。

「キリストを神の玉座からカルバリーの十字架という祭壇の神秘へと召し出した使命は、おぼろげに理解され、かすかにわかっているにすぎないが、その使命はだんだん明らかになり、キリストという犠牲の中に、他のあらゆる愛の使命の源と原則が見いだされるということが、わかるであろう」（『天上で』319ページ、英文）。

考えてみましょう

- ◆ 完璧な神によって創造された完璧な存在が、罪に落ちるのでしょうか。このことは、神の世界における道徳的自由の現実について、どのようなことを教えてください。また、そのような自由は、神の御品性について、どのようなことを明らかにしているのでしょうか。（日曜日参照）
- ◆ もし神が正義の神だけであられるなら、あなたの運命はどうなりますか。あなたがその運命を受け入れざるをえないのは、なぜですか。（月曜日参照）

話し合いのための質問

- ① 大争闘がすっかり終わるまでに、サタンや失われた者たちを含むすべての知的被造物は、罪と反逆に対する神の扱いに関して、神の義と公正さと正しさを認めることになります。このような思想について、じっくり考えてみてください。これは理解しにくい、難しい概念ですが、神の御品性について、どのようなことを語っていますか。またその思想は、道徳的自由の現実と、神が創造された宇宙にとって自由がいかに神聖で、基本的なものであるかについて、どのようなことを教えてくれるでしょうか。



聖所から得られる勧告

●暗唱聖句●

「更に、わたしたちには神の家を支配する偉大な祭司がおられるのですから、心は清められて、良心のとがめはなくなり、体は清い水で洗われています。信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか」
(ヘブライ 10：21、22、新共同訳)

「さらに、神の家を治める大いなる祭司があるのだから、心はすがれて良心のとがめを去り、からだは清い水で洗われ、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか」
(ヘブル 10：21、22、口語訳)

今週の聖句

ヘブライ 10：19～25、ヘブライ 4：16、出エジプト記 24：8、ヤコブ 4：7、8、ヨハネ 13：34、ヘブライ 10：24、25

安息日午後

今週のテーマ

12月21日

ヘブライ人への手紙は最初から最後まで、クリスチャンの信仰に関する聖句と、クリスチャン生活に関する聖句とが、交互に記されています。言い換えれば、神学が実践的な意味を持っているということです。信仰に関する「何」かが、信仰を「いかに」生きるかにつながっているのです。ヘブライ人への手紙において、記者は、私たちの犠牲にして大祭司（ヘブ 7：1～10、18）としてのキリストという壮大な神学的な絵画を描いたあと、これらの真理が意味するところに従って生きようと、信徒を励まし、強く勧めています。このような勧告は、特にヘブライ 10：19～25に見られます。

原語のギリシア語において、この聖句は一つの長い複文です。この文は、二つの基本的事実から三つの勧告へとつながる構成になっており、それぞれが「さあ……しましょう（さあ……しようではありませんか）」という語句で始まっているとともに、「信仰」「希望」「愛」というなじみ深いトリオが出てきます。また、「さあ……しましょう」という語句で始まるそれぞれの箇所には、クリスチャン生活のもう一つの側面も含まれています。

私たちは今週の研究において、ヘブライ 10：19～25 と、そこに書かれているクリスチャン生活のための実践的勧告について学びます。

日曜日

天の聖所へ入る

12月22日

問1 ヘブライ 4:16、6:19、20、10:19～21 を読んでください。信者は何の中に入るのですか。それは、どのようなことを意味していますか。そこには、どのような希望が与えられており、もっと重要なことは、この希望によって、私たちの生活や信仰は、どのような影響を受けるべきでしょうか。

信者は天の聖所、神の玉座へと霊的に入ることができます。私たちが入れるのは、キリストの血と、キリストが大祭司として私たちの代表であられることによります。ですから、私たちは神との親密さを求めることができます。先の聖句は、私たちには、神の御前におられるイエス・キリストといういかり錨があること（ヘブ 4:16、6:19、20）を請け合っています。私たちにとって確実なことは、キリストが天の大祭司に就任されたのち、神の御前に出られたということです（ヘブ 6:20）。キリストはその就任の際に、王族としての地位を象徴する天の玉座に着かれました（黙 3:21）。

私たちにとっての福音は、私たちの代表者が父なる神の前におられるという事実です。自分自身が罪深い地上の祭司では、私たちの代わりになれません。私たちには、はるかにすばらしい祭司がいます。父なる神と子なる神を隔てるものは、何もありません。私たちの大祭司であられるイエスは、完全で、罪がないため、神のきよ聖さから身を遮るための幕を必要とされないのです（ヘブ 10:20）。

「執り成しとは、何だろうか。執り成しは、有限な人間と無限の神の玉座とをつなぐ金の鎖である。キリストが救うために死なれたその人間は、祈りを通して神の玉座に入り、その願いは、御自分の血によって彼を買い取られたイエスによって取り上げられる。私たちの偉大なる大祭司は御自分の義を誠実な嘆願者のかたわらに置き、キリストの祈りがその人間の嘆願の祈りに溶け込むのである」（『キリストを知るために』78 ページ、英文）。

私たちが父なる神と親しい交わりを持つことができるとは、なんとすばらしい約束でしょうか。それもこれも、イエスが私たちのためになされたことのゆえであり、イエスが私たちのためにしておられることのゆえなのです。

◆ イエスがあなたのために天で執り成しをしておられることの意味について、じっくり考えてみてください。なぜあなたは、この執り成しを大いに必要としているのですか。

ヘブライ10:22を読んでください。天の聖所におられる神に近づくための条件として、以下のようなことが記されています。この聖句によれば、礼拝者は神に近づく際に、四つの条件を満たさなければなりません。

①**真心から近づく**——心とは、私たちの内的状態、思い、動機、感情、意志、品性などのことです。神は私たちに、純真であってほしい、と願っておられます。しかし心は、それが清められるときにだけ、純真になるのです。これは、私たちが完全だという意味ではなく、私たちがキリストの御品性をあらわそうとして、努力しているということです。

②**信頼しきって近づく**——きのうの研究で学んだように、私たちが神に近づくことができることを疑う理由はありません。

③**心を清められ、良心のとがめなく近づく**——「心を清められ(る)」(新改訳「心に血の注ぎを受けて」)とは、聖所に関係する表現で、荒れ野の幕屋において人々に血を注ぎかけた(振りかけた、塗った)ことを指しており(出24:8、レビ8:23、24)、それによって彼らは儀礼的に清められましたが、彼らの良心まで清められたものではありませんでした(ヘブ9:9、13)。しかし、天の真の幕屋における清めは、キリストの血によってもたらされる良心の清めです(ヘブ9:14)。悔い改めた罪人の義認が、この清めによって象徴されています。私たちがとがめなき良心を持てるのは、赦されたからなのです。

④**体を清い水で洗ってから近づく**——この表現は、クリスチャンのバプテスマをほのめかしているように思えますが、もっと霊的な意味で、つまり「言葉を伴う水の洗い」(エフェ5:26)という意味で理解することもできます。聖書を読み、その原則を私たちの生活に適用するということです。

ヤコブ4:7、8で、ヤコブは手紙の読者の「二心」(口語訳)的な態度に悩んでいます。どうやら彼らは、神に対する一途さを失ってしまったようです。彼らは信用を失い、危険が差し迫っていました。ヤコブは聖所における清めに関連した言葉を用いています。清めがなされた場合に限って神に近づくことができるというのは、まったく聖所的な概念なのです。

◆ 神だけが私たちの心を清めることがおできになるということは、明らかです。肝心なのは、私たちの生活の中で、この恵みの業を神にしていたくために、私たちがどのようなつらい選択をするのか、という点なのです。

火曜日

信仰——確信せよ

12月24日

ヘブライ10:19～25をもう一度読んでください。一つの主題が何度も繰り返されています。それは「確信」です。「確信」(ヘブ10:19)と訳されているギリシア語は、新約聖書の中で私たちと神との新しい関係の特徴づける「大胆さ」「勇気」「恐れのないこと」などを意味します。

本来この言葉は、何でも話せる開放性を意味するのですが、この聖句では、祈りによって自由に神に近づくことができることを意味しています。神との関係におけるこのような開放性が、喜びに満ちた確信を生み出すのです。私たちの確信の理由と目的は、天に大祭司がおられ、彼を通して神の御前に出ることができることです。このように神に近づくことには制約がなく、私たち自身や私たちの誤った選択による以外は、何ものによっても妨げられません。だれもが、天の聖所へ入るようにと招かれています。

このような確信は、どこから生まれるのでしょうか。それは私たち自身の中から生まれるのではなく、またしても、イエスが私たちのために、神に近づく権利を自らの血で勝ち得られたことに気づくことによるのです。

ヘブライ人への手紙の中には、ほかにも確信(大胆さ、熱心さ)について触れている聖句があります(ヘブ3:6、14、4:16、6:11、11:1)。

確信は、私たち自身に^{いかり}錨を投じるのではなく、キリストにのみ錨を投じます。確信の条件は、私たちがだれなのかによるのではなく、私たちの仲保者がどなたなのかによるのです。興味深いことに、信者は「十分な確信」(ヘブ6:11、10:22、新改訳)以下のものを持つようになるとは、どこにも記されていません。明らかに、イエスの死によって永遠に開かれている新しい道は、必ず十分な確信へ至るのです。それ以外のものはありえません。

キリストの確信を手に入れ、それを信仰によって保つ方法は、二つあります。一つは、信仰そのものによって(エフェ3:12)であり、もう一つは、他者に対する忠実な奉仕によって(1テモ3:13)です。いずれの側面も必要なものであり、重要です。ヘブライ人への手紙においても、信仰の確信と自分をクリスチャンとして証明することへの勧めは、密接に関係しています。クリスチャンの生活は、信仰から決して切り離せないのです。

◆ 人生におけるどのようなことが、神に対するあなたの確信や、神の善意に対するあなたの十分な確信を揺るがしますか。このような霊的危機から身を守るために、あなたはどのようなことができますか。

ヘブライ3:6、14、4:14、6:18、10:23を読んでください。救いの確信を持つことに加えて、私たち全員に与えられている希望を維持し、持ち続けることが重要です。ヘブライ人への手紙の中で、「しっかりと保つ（持ち続ける）こと」が真剣に訴えられています。印象として、信者の中にキリスト教の信仰と希望から脱落しかかっている人たちがいたようです。パウロは彼らを励まして、去らせないようにしなければならませんでした。これらの聖句は、私たちがしっかりと持ち続けるに値するもの——希望、確信、告白——について、極めて似通った形で述べています。これらの言葉はどれも、客観的な意味で、キリスト教の信仰を指しています。私たちが希望を抱き、確信し、告白するのは、私たちの希望が自分の中にあるからではなく、イエス御自身とイエスが私たちのためになされたことの中にあるからです。この重要な真理を忘れるなら、途端に私たちは確信を失うことでしょう。

これらの聖句は、「最初」（ヘブ3:14）から「最後」（ヘブ3:6〔口語訳〕、14、6:11）までしっかりしているようにと、私たちに挑戦を突きつけています。「動揺しないで」（ヘブ10:23、新改訳）しっかりしていることは、不変で揺るぎない信仰を指しています。状況がどうであろうと、私たちの希望はそのままですし、神に対する私たちの献身も変わりません。なぜなら、神は誠実な方であり、約束したことを果たされると、私たちは信じることができるからです。

神が御自分の約束をお守りになることは、疑いの余地がありません。神はアブラハムとサラにお与えになった約束を成就なさいました（ロマ4:19～21）。キリストの初臨の約束も成就なさいましたし（ガラ3:19）、再臨の約束も成就されるでしょう（ヘブ12:26）。しかし、神の究極の約束は、永遠の昔に約束された「永遠の命」なのです（テト1:2、Iヨハ2:25）。

神の誠実さは変わりません。「わたしたちが誠実でなくても、キリストは常に真実であられる。キリストは御自身を／否むことができないからである」（IIテモ2:13）。私たちの不誠実、不信仰が、私たちに対する神の御意思を変えることはありません。私たちが道徳的に退廃しても、神の約束は揺るぎません。その約束は今もなお私たちのものです。なぜなら、誠実さは神の御品性の一部だからです。

木曜日

愛——互いに励まし合う

12月26日

「また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか」(ヘブ10:24、新改訳)。

ヘブライ10:23の勧告は個人の態度に焦点を当てていますが、次の24節は信者の共同体を視野に入れています。私たちはキリストとともに歩む道を、独りきりで歩くではありません。私たちは常に互いを気遣い合うべきです。

互いに愛し合いなさい(ヨハ13:34、ガラ5:13)という挑戦は、伝統的にクリスチャンの言動の一要素となっています。しかし、互いに愛し合うことは、自然に生じるものではありません。それが「注意し合(う)」(新共同訳「心がけ(る)」)行為であるということは、集中して注意深く考える行為であることを示唆しています。私たちは、仲間の信者に気を配り、彼らを促してほかの仲間を愛し、善行をするようにさせなさい、と勧められているのです。しかし残念ながら、私たちは仲間を怒らせ、敵に回すことのほうが、彼らをキリストの愛へ駆り立てることよりも簡単ではないでしょうか。

もしそうであるなら、共同体の最善のために私たちの努力を結集し、私たちの愛の促しのゆえに、他の共同体員も愛し、善行をせずにはいられないようにしましょう。

ヘブライ10:24、25を読んでください。ここに「愛」と「善行」が、「集会」と関係して出てきます。ヘブライ人への手紙が強調している一つの点は、クリスチャンの集会において、私たちは互いに愛を表現できるということです。もしだれかが礼拝に来なかったなら、どうしてその人はキリストの愛の律法を全うすることができるのでしょうか。ある人たちは、彼らには集会を欠席するもっともな理由があるのだ、と考えるかもしれません。しかし、ヘブライ人への手紙はこの微妙な問題について、詰まるところ、彼らが欠席するのは彼ら自身の無関心なのかもしれない、と触れています。だれでも望むなら、礼拝や教会の諸集会に出席しない理由を、いつでも見つけることができるでしょう。しかしそのような理由は、(他者への祝福となるという)出席すべき理由に比べれば、さしたるものではありません。

このような行動は、キリストの再臨の日が近づいているときだからこそ、一層急を要するのです。ヘブライ10:19～25の最初の部分で記者は、天の聖所におられる神に近づきなさい、と信者に勧告し、終わりの部分では、主の日が近づいていることを彼らに思い起こさせています。クリスチャンの行動の主要な動機は、常にキリストの再臨でなければなりません。

「仲保者なる方は、その職務と働きにおいて、また威厳と栄光において、予型としての地上の祭司をはるかにしのいでおられる。……この救い主は、いと高き方とその民との間に立つ仲保者にならねばならなかった。このような対策によって、罪責のある罪人が他者「キリスト」の仲介を通して神の前に行ける道が開かれたのである。罪人は罪を帯びたまま、また彼が自分自身のうちに持っているいかなる功績によっても、自分で直接行くことはできない。キリストだけが、神の律法の要求に等しい献げ物をささげることによって、その道を開くことがおできになったのである。キリストは完全であり、罪に汚れておられなかった。彼には傷も汚れもなかった。もし無限の価値を持つ救済策がなされなければ、罪の恐ろしい結果がどの程度のものであるかは、決して理解されなかったのである」（『預言の霊』第2巻11ページ、英文）。

「キリストの贖いと執り成しに対する信仰は、交戦状態の教会で私たちを苦しめる誘惑の中にあつて、私たちを不動で揺るぎなく保つのである」（『SDA聖書注解』第7A巻484ページ）。

考えてみましょう

- ◆ 罪によって失望するのは、実にたやすいことです。どうしたらそのような罪に打ち勝てますか。それと同時に、失敗したときに、どうしたらあきらめずにすみえますか。なぜ私たちは、とりわけ失敗したときに、この約束にしがみつかなければならないのでしょうか。（水曜日参照）
- ◆ あなたの教会の中で、あなたの言葉、行為、あるいは、あなたがただ存在することによって、だれを励ましたいですか。もしあなたがそのような意図において思慮深ければ、人々の生活に大きな変化をもたらし、そのお返しとして、あなた自身が祝福を受けることができます。（木曜日参照）

話し合いのための質問

- ① 「十分な確信」と思い上がった態度との違いは、何ですか。
- ② 私たちはもっと愛し合い、もっと善行を行う生活が送れるように互いに励まし合う霊的な友情を、どうしたら深めることができますか。ともに集会を持つことによって、あなたはどのような霊的恩恵を受けることができますか。教会でほかのクリスチャンと礼拝できなかったなら、あなたはどのようなものを失うでしょうか。

私の伝道活動報告

2012 年 4 期 ☐ 大人 ☐ 青年 (30 歳まで)

項 目 \ 週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	合計
	10/5	10/12	10/19	10/26	11/2	11/9	11/16	11/23	11/30	12/7	12/14	12/21	12/28	
1. 文書配布数 (トラクト・チラシ・雑誌・本)														
2. 授けた聖書研究数 (安息日学校クラスも含む)														
3. 講演会、講習会、訪問伝道、 チラシ・トラクト配布、奉仕 活動などに参加した数														

◎統計上,必要ですので、期末に信徒伝道会役員に必ずご提出ください。

2013 年度 日 没 表

月／日	札幌	仙台	東京	名古屋	大阪	広島	福岡	鹿児島	沖縄
10 / 4	5 : 13	5 : 17	5 : 23	5 : 34	5 : 40	5 : 52	6 : 00	6 : 00	6 : 14
11	5 : 01	5 : 06	5 : 13	5 : 24	5 : 30	5 : 42	5 : 51	5 : 52	6 : 07
18	4 : 49	4 : 56	5 : 03	5 : 15	5 : 21	5 : 34	5 : 42	5 : 44	6 : 00
25	4 : 38	4 : 48	4 : 55	5 : 07	5 : 13	5 : 26	5 : 34	5 : 36	5 : 54
11 / 1	4 : 29	4 : 39	4 : 47	4 : 59	5 : 06	5 : 18	5 : 27	5 : 30	5 : 49
8	4 : 20	4 : 31	4 : 40	4 : 52	4 : 59	5 : 12	5 : 21	5 : 24	5 : 44
15	4 : 12	4 : 26	4 : 35	4 : 47	4 : 53	5 : 07	5 : 16	5 : 19	5 : 41
22	4 : 06	4 : 21	4 : 31	4 : 44	4 : 50	5 : 03	5 : 13	5 : 16	5 : 38
29	4 : 02	4 : 18	4 : 29	4 : 42	4 : 48	5 : 01	5 : 11	5 : 15	5 : 37
12 / 6	4 : 00	4 : 16	4 : 28	4 : 40	4 : 47	5 : 00	5 : 10	5 : 14	5 : 37
13	4 : 01	4 : 17	4 : 29	4 : 41	4 : 48	5 : 01	5 : 11	5 : 16	5 : 39
20	4 : 02	4 : 20	4 : 31	4 : 44	4 : 51	5 : 04	5 : 14	5 : 19	5 : 43
27	4 : 06	4 : 23	4 : 34	4 : 47	4 : 54	5 : 07	5 : 18	5 : 22	5 : 45

2014 年第 1 期研究予告

総題 弟子訓練

第 1 課 弟子訓練と聖書

日曜日 イエスと聖書

月曜日 聖書の権威

火曜日 公の場での宣教

水曜日 個人伝道

木曜日 次世代

〈著者〉ダン・ソリス（牧師、教区部長、大学教授）

今期の副読本

●『神さまと私が出会うところ ―聖所の教理―』

マルティン・プロブストル著 福音社編集部訳

A5判 定価 1,000 円(税込) セブンスデー・アドベンチスト教団安息日学校部発行
世の罪のための贖いの供え物となられたキリストは、十字架において、神さまの愛と御品性を最も明瞭に示されました。聖所は、この真理をより鮮明に写し出しています。この真理を確信できるように、本書は、聖句を例証し、説得力を持って、語りかけています。

●『明日への希望』(『希望への光』) エレン・G・ホワイト著

A5判 定価 12,600 円(税込) 福音社発行

聖書の副読本ともいえるホワイト選集をはじめ、『キリストへの道』『祝福の山』『キリストの実物教訓』が合本になっています。ホワイト選集の中の『人類のあけぼの』『各時代の大争闘』の中に今期のガイドの内容に関連する記述が多く出てきます。

●『アドベンチストの信仰』 セブンスデー・アドベンチスト教団

A5判 定価 5,000 円 セブンスデー・アドベンチスト教団発行

アドベンチスト教団信仰の概要を詳しく解説している教理本です。英文では1988年に出版され、日本語版は1995年に出版されたため、信仰の概要27項目のみの解説となっています。聖所の教理についてのアドベンチスト教会の基本的理解を復習するための参考になります。

* ABC がお取り扱いをしております。御注文は、教会書籍係を通してお願いいたします。

● 伝道局安息日学校部ホームページ、お役立ち「今週のポイント！」

数種類、毎週の聖書研究ガイドのポイントが掲載されています。前の週の金曜日にはホームページに載っているものがありますので、次の週に学ぶ内容の予習としても使うことができますし、日々毎研究の参考としてポイントを見ながらガイドを学ぶこともできます。ホームページからダウンロードまたは直接印刷してお使い下さい。

<http://www.adventist.jp/category/biblestudy/sspoint/>

安息日学校聖書研究ガイド 『聖所』

定 価
発 行 日
原 作 版 発 行

600 円(税込)
2013 年 9 月 25 日
セブンスデー・アドベンチスト
世界総会安息日学校・信徒伝道部

日本語版発行

教団安息日学校・信徒伝道部
〒190-0011 東京都立川市高松町 3-21-8

トランス・ヨーロッパ支部

グリーンランド

★レイキャビーク
アイスランド

北大西洋

北海

アイルランド

★ダブリン

イギリス

★ロンドン

①

デンマーク

スウェーデン

★オスロ

★ストックホルム

★コペンハーゲン

ポーランド

★ワルシャワ

フィンランド

★ヘルシンキ

★タリン

★エストニア

★リガ

★ラトビア

★リトアニア

★ビリニュス

ベラルーシ

ウクライナ

モルドバ

ルーマニア

ブルガリア

マケドニア

ギリシア

★アテネ

②

③

アルバニア

モンテネグロ

セルビア

ボスニア・ヘルツェゴビナ

クロアチア

スロベニア

オーストリア

イタリア

ドイツ

ベルギー

フランス

ルクセンブルク

オランダ

ベルギー

ドイツ

フランス

ルクセンブルク

オランダ

ベルギー

ドイツ

フランス

ルクセンブルク

オランダ

ベルギー

ドイツ

フランス

教団	教会	集会	教会員	人口
アドリア海	103	13	3,707	9,654,000
バルト海	89	0	6,531	6,768,000
イギリス	257	42	33,878	67,560,000
デンマーク	45	1	2,527	5,681,000
フィンランド	70	5	4,952	5,387,000
ハンガリー	105	18	4,700	9,972,000
オランダ	56	8	5,059	16,694,000
ノルウェー	62	2	4,555	4,952,000
ポーランド	116	32	5,781	38,222,000
南東ヨーロッパ	210	8	7,968	16,080,000
スウェーデン	36	3	2,757	9,447,000
直轄伝道地 (キプロス、ギリシア、アイスランド)	18	12	1,111	12,462,000
合計	1,167	144	83,526	202,879,000

伝道計画

- ① ニューボールド大学の学生寮（イギリス）
- ② アテネの伝道センター（ギリシア）
- ③ オフリドの伝道・青年・訓練センター（マケドニア）
- 支部全域における聖書3-D伝道統合プログラム

子どものための計画：乳児から10代前半の子どもたちに焦点を当てた、教会に属していない家族を対象とする伝道プログラム「汚い教会（Messy Church）」

※詳しい情報は www.adventistmission.org をご覧ください。

地中海